

15-2

皇紀二千六百年を祝し奉る

文樂座人形浄瑠璃
奉頌紀念興行



四ッ橋畔

文樂座

乍憚口上

残んの寒さ未だ中々に去りあへず候へども既に春めかしき今日此頃四方様には愈々御盛榮に遊ばされ大慶至極に奉存候 然る處當座に於ては皇紀二千六百年の耀やかしき國威を仰ぐと共に國粹藝術保存の重責を思ひその傳統の日本精神をいやが上にも發揚いたすべきやう相心懸け當る二月興行にては一座總出演の花々しき陣容をもつて當座秘藏の名狂言を始めとして皇紀二千六百年奉頌の微意をもつて永らく上演せざりし近松門左衛門の名作に新脚色作曲を加えて上中二卷に分ち御鑑賞を乞ひ奉ると共に曩に當座に於て發表致し候「三勇士名譽肉彈」の愛國的熱演に御賛同を得たる向より再三再上演の御勸誘を蒙り之れこそ畢生の光榮と存じ茲に併せて國光發揮の意をもつて又々御鑑賞を仰ぐ次第と相成申候まゝ何卒よろしく御諒察を賜り相變らず御最負御引立の上陸續御來場被下成度偏に御願奉申上候

昭和十五年二月一日

四ツ橋 文樂座 敬白

昭和十五年二月一日初日

初日午後二時開幕
毎日午後三時開幕

・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓三十錢

(一階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓三十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(外に各等入場料一圓)

一等御座席)は五日前より
一等椅子席)

前賣切符發賣致居候

前賣切符

專用電話

南⑤四七壹壹番
一般御用 南⑤三〇三二番
の電話 南⑤三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますから御便利で御座ります。



西条河村 山村若葉振附
御祝儀 豆 ま き

厄男鬼 福年厄
竹本本本本本 竹本本本本本 竹本本本本本 竹本本本本本 竹本本本本本
伊達部太夫 播磨路太夫 常津磨子太夫 宮佐太夫 重衛衛
鶴野吉重衛 野吉重衛 鶴野吉重衛 鶴野吉重衛 鶴野吉重衛
豊鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤
郎友季六左門造 郎友季六左門造 郎友季六左門造 郎友季六左門造 郎友季六左門造

近江源氏先陣館

佐々木盛綱前 首實檢の段 後
竹本本本本本 豊鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤
大隅太夫 廣駒太夫 豊駒太夫 豊駒太夫 豊駒太夫
郎助夫 郎助夫 郎助夫 郎助夫 郎助夫

紙の國屋小春 紙屋治兵衛 天網島

北新地 河庄の段 切 中
竹本本本本本 豊鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤
文字左衛門太夫 新左衛門太夫 津次郎 鶴野澤 鶴野澤
郎助夫 郎助夫 郎助夫 郎助夫 郎助夫

ちよんがれの段 紙屋内の段 切
鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤
鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤
鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤
鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤

奉頌皇紀二千六百年

上の巻 源平時代の貞節
中の巻 足利時代の忠孝
下の巻 昭和の義烈

近松門左衛門作 上の巻 伏見里

常盤御前 恩愛の段
竹本本本本本 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤 鶴野澤
伊達部太夫 南友衛 南友衛 南友衛 南友衛
造門夫 造門夫 造門夫 造門夫 造門夫

皇紀二千六百年を祝ふ奉頌 行興念紀頌奉 形人座樂文

二月初一日
(しなべ延日限日八十)
初日 午後二時開幕
二日 午後三時開幕

櫻井驛 訣別の段
楠正成 楠正成 楠正成
黨行 黨行 黨行

竹本本本本本 野澤 野澤 野澤 野澤 野澤
織源太夫 織源太夫 織源太夫 織源太夫 織源太夫
太夫 太夫 太夫 太夫 太夫

松居松翁作鶴屋南北脚色繪澤友次郎作曲
下の巻 三勇士名譽肉彈

下元旅團長 松江中隊長 松江中隊長 松江中隊長 松江中隊長
作江一等兵 作江一等兵 作江一等兵 作江一等兵 作江一等兵
北川一等兵 北川一等兵 北川一等兵 北川一等兵 北川一等兵
小隊長 小隊長 小隊長 小隊長 小隊長
馬田軍曹 馬田軍曹 馬田軍曹 馬田軍曹 馬田軍曹
内田伍長 内田伍長 内田伍長 内田伍長 内田伍長
便衣隊長 便衣隊長 便衣隊長 便衣隊長 便衣隊長

櫻井驛訣別の段

常盤御前 藤九郎 藤九郎 藤九郎 藤九郎 藤九郎
牛若丸 牛若丸 牛若丸 牛若丸 牛若丸
乙若丸 乙若丸 乙若丸 乙若丸 乙若丸
今若丸 今若丸 今若丸 今若丸 今若丸
常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前
吉田文十郎 吉田文十郎 吉田文十郎 吉田文十郎 吉田文十郎
桐田紋次郎 桐田紋次郎 桐田紋次郎 桐田紋次郎 桐田紋次郎
吉田文之助 吉田文之助 吉田文之助 吉田文之助 吉田文之助
大田文之助 大田文之助 大田文之助 大田文之助 大田文之助

三勇士名譽肉彈

松中隊長 松中隊長 松中隊長 松中隊長 松中隊長
馬田軍曹 馬田軍曹 馬田軍曹 馬田軍曹 馬田軍曹
大島少尉 大島少尉 大島少尉 大島少尉 大島少尉
東島少尉 東島少尉 東島少尉 東島少尉 東島少尉
島田少尉 島田少尉 島田少尉 島田少尉 島田少尉
古野兵 古野兵 古野兵 古野兵 古野兵
高野兵 高野兵 高野兵 高野兵 高野兵
黒澤兵 黒澤兵 黒澤兵 黒澤兵 黒澤兵
村上兵 村上兵 村上兵 村上兵 村上兵
北川兵 北川兵 北川兵 北川兵 北川兵
江下兵 江下兵 江下兵 江下兵 江下兵
作田兵 作田兵 作田兵 作田兵 作田兵
内田兵 内田兵 内田兵 内田兵 内田兵
下元旅團 下元旅團 下元旅團 下元旅團 下元旅團
兵士 兵士 兵士 兵士 兵士

河庄の段

紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春
紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春
紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春
紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春
紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春
紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春
紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春
紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春
紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春
紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春 紀國屋小春

紙屋内の段

紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛
紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛
紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛
紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛
紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛
紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛
紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛
紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛
紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛
紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛 紙屋兵衛

常盤御前恩愛の段

常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前
常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前
常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前
常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前
常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前
常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前
常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前
常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前
常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前
常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前 常盤御前

文樂座 四ッ橋畔

電話南四七壹壹番



☆うせまし廢全を品製金☆



國民精神總動員

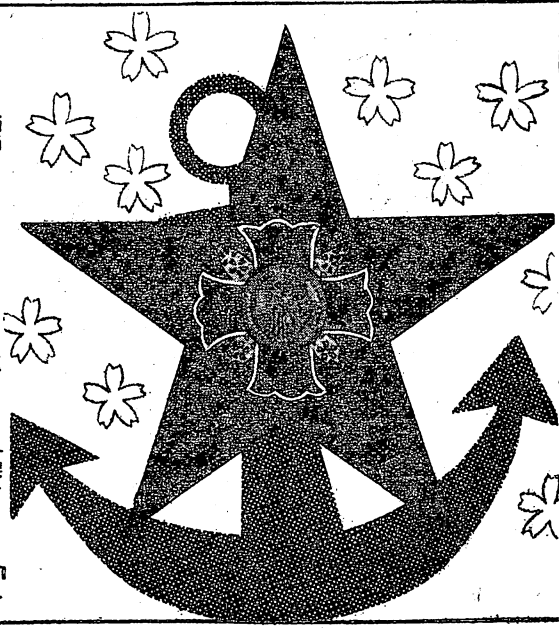


盡忠報國

舉國一致

堅忍持久

國を護つた
傷兵護れ



傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟

皇紀二千六百年を祝し奉る……

文樂座 奉頌紀念興行

人形淨瑠璃

二月一日 初日

(十八日まで日延べなし)

初日午後二時開幕
毎日午後三時開幕

西亭詞符・山村若榮振附

御祝儀 豆

三時二十分より
(幕間十分)

三時二十分より
(幕間十分)

近江源氏先陣館

三時三十分より
(幕間十五分)

網島

五時十五分より
八時三十分まで
(幕間十分)

皇紀二千六百年奉祝藝文

源平時代の貞節
足利時代の忠孝
昭利の義烈

奉頌皇紀二千六百年

近松門左衛門作

上の巻 伏

見里

八時四十分より
九時十五分まで
(幕間十分)

中の巻 大

櫻井謙訣別の段

九時二十五分より
九時四十五分まで
(幕間十分)

下の巻 三勇士名譽肉彈

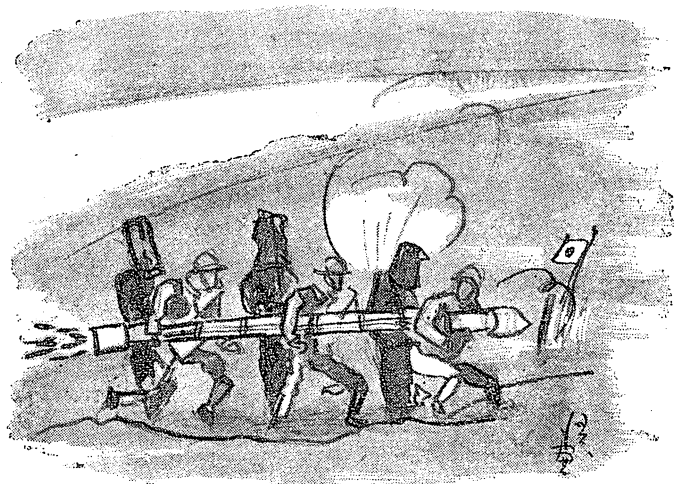
松居松翁作・鶴屋南北脚色・鶴澤友次郎作

九時五十五分より
十時三十分まで
(打出し)

網島

源平時代の貞節
足利時代の忠孝
昭利の義烈

八時四十分より
九時十五分まで
(幕間十分)





西亭詞符
山村若榮振附

御祝儀 豆まき

御祝儀 豆まき

厄 男 女
福 年 厄
竹本南都太夫
竹本伊達太夫
竹本播路太夫
竹本常子太夫
竹本津磨太夫
豊竹宮太夫
竹本土佐夫太夫
鶴澤重衛
鶴澤友衛
野澤吉園
野澤清六
鶴澤清二
豊澤友郎

年厄福

人形

女 吉田榮三郎
鬼 吉田玉幸
男 吉田光之助

本曲は西亭の作詞作曲になる新作淨瑠璃を邦舞界の花形山村若榮女史が振附けたもので、民間に行はれる床しい年中行事の淨曲化、人形劇化——私達は演者と共に相親しみつゝ季節の喜びを味ひ、聖壽の萬歳を祝はうと、茲に初めて上演されることになつた所作事です。

(床本) 御祝儀 豆まき

それ立春追儺おたなひ先づ百拜天神地祇。八百萬神祀りして、天に願ふは惡魔降伏地に祈らんはげがれ不淨。諸疫災ひ取り除き、福徳授けさせ給へと四方を祓ふ節分會。
ふけよふけよ、ふく福風に、ふかれ

うかれて福女御が 惠方惠比須や歳徳神詣り心も安隠やすらひにまめのかず、年の數一、二福徳圓滿ふくとくまんまんを願ふ誠のしほらしき、時に一陣惡風あくかぜにつれ、そも、是は蓬萊の鬼門おにのどら役請やくまがら厄神なりその福やらじおさへおふ、福はこなたへ厄捨てんされどぼんのふすてやれず、わしが思ひの慾心、胸のほのふを叶ふならさらばやらふぞ、そもやそも、四方詣りの年々に、さまのきりよふの吉田ゆへ見染北野やつぼみの梅まだ早咲きもせぬ壬生のいつかみのなる鐘のこえ東寺に鳴りしを知る日より、せぐる心はせきも無き加茂の流れの水しぶき、ぬれて河原の小夜千鳥鳴く音聞ふとしなだればエ、けがらわしい厄神と拂へどいかなつきまとふあられなき身に豆あらればらりと降るやすつてんでん、これは誰がわざてんころりどふした事

の荒風や素袍の肩に風を切り大入樹を携へた姿よい衆や荒若衆春立初めし年男、福は内鬼は外へ不淨けがれの厄拂へ悪魔外道を降伏とばらり〜と打つ豆にたまらぬ〜ゆるされと去年の悪風あくかぜにふかれつゝ東の大路西の路次門ぢきもんの柵しほに目をちくり鬼打豆にてんころり頭おさへてあいたしこ腰をさすつてあいたしこ遠近おちもとなく逃げまどひ赦させ給へ年男數の寶を奉る。

鬼一ツとますや鄙ひなも都もおしなべて君が御齡壽みとしほかんさて

年二ツとますや福は年々家の内、家内安全無事息災さて

鬼三ツとますや御代も納まり國榮へ子寶もふけて家繁昌さて

福四ツとますや芝居はいつも松竹の大入叶ふて目出度けれさて

全部五ツとますやいつまでも盡きぬ

福のかず十百千萬萬々歳ちよろけんや〜ちよろが乗つた大福のドイ〜こわやドイこわやゆるせ〜とこ〜かしこ哀れおかしの形振りを拍子にのせてアハ、〜アハ、〜、笑ふ門には福の神かくて納まる君が代の袂たもとひ清めて千代よろづ目出度楯と祝ひける。

會我廼家五郎劇

二月初日

毎夕四時半開幕

- 第一 故郷の妹 二場
- 第二 日給五十圓 二場
- 第三 奇傑燕石 一場
- 第三十六快笑の内
- 第四 樂土の夢 一場
- 第五 春風一夕囃 一場

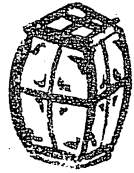
日曜マチネー 開正 演午

御觀劇料

- 特等席 三圓三十錢
 - 一等席 二圓七十錢
 - 二等席 一圓五十錢
 - 三等席 一圓
 - 四等席 五十錢
- (他に各等入場税一圓)

どうとんぼり

中座



か

あふみげんじ せんぢんやかか
近江源氏先陣館

佐々木盛綱首實檢の段

佐々木盛綱首實檢の段

前 竹本大隅太夫
後 豊澤廣助
豊竹駒太夫
鶴澤清二郎

人形

軍	竹	二	注	榛	古	北	佐	佐	母	妻	佐	和
ノ	度	谷	々	々	々	々	々	々	々	々	々	兵
下	の	新	時	小	小	小	小	小	小	小	小	衛
孫	注	十	左	衛	門	致	郎	郎	郎	郎	郎	盛
兵	八	進	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	網
大	吉	吉	吉	吉	桐	桐	桐	桐	吉	吉	吉	吉
田	田	田	田	田	竹	竹	竹	竹	田	田	田	田
ぜ	文	文	兵	三	門	紋	紋	五	文	政	榮	玉
い	徳	市	郎	次	郎	造	昇	司	郎	郎	郎	幸

この淨瑠璃は明和六年十二月九日（二四二九）から再興の竹本座興行。作者は近松半二を筆頭に八民平七、三好松洛、竹本三郎兵衛等の合作。鎌倉に世界を借り史劇の好材題大阪陣を脚色したものゝ中、最も名作と稱せられてゐる。近江の坂本城を大阪城に擬し近江源氏の嫡流佐々木三郎盛綱と弟四郎高綱とが敵味方に別れ、義によつて骨肉相戦ふ處に山を設けたもので、この首實檢の段は全九段の内第八段に當り、高綱の子小四郎が盛綱の子小三郎に生捕られ、高綱の贖首に「父様……」と戦の驅引きに犠牲となつて父につくすと云ふ身代り首實檢の最も技巧を凝し

た構成で、親子恩愛の情、兄弟愛、親子夫妻骨肉の嘆に人情の機微を穿つた作者の技倆を窺ふに足る場面です。

（床本）盛綱首實檢の段（前）

盛綱は只忙然と、軍慮を帷幕の打傾き思案の扇からりと捨、母人それにおはするかと音なふ聲に立出る、陣屋のくまゝ後先見廻し母の膝にすり寄り親の役目を子が勤るは順なれ共、御老體の母人に御苦勞お頼み申さねば叶はぬ事、申さぬ先から心得たとある、御誓言承りたしと、事有げなる願ひの品、聞かねど追佐々木の後室、打うなづき親子の中に改めて頼むと有はよくの事ならめ仔細はしらねど心得ました、ハツア早速の御承知忝し、お頼みの仔細と申すは最前の囚人拙者がためには

甥母人の爲には孫の小四郎を今宵の
中に母のお手にかけてられてと聞きも
あへずコレ、盛綱最前我君よりの
仰せ渡され必ず小四郎に過ぎすな、
殺すなどの御説ならずや、サア其殺
すなど御説故に猶以て殺さじやなら
ぬ。辯舌を以て人を懐意は生置て人質と
し、子を餌に飼て佐々木四郎左衛門
高綱を味方に付ん謀鏡にかけて現
はれたり、中々心を變ずべき弟高綱
とは思はね共いかなる大丈夫も我子
の愛には迷ふならひ、萬が一此謀に
陥つて、降參などの心付かば子故に
不忠の名を流さん事残念至極、よし
さはなく共、小四郎が掬となつて、
生ある中は恩愛といふ大敵に高綱が
弓勢も弱り、刃金も自然となまる道
理、迷ひの種の此小四郎一時も早く
殺して仕舞へば、弟が義心猶々鐵石

是ぞ兄弟弓矢の情と有て我手にかく
る時は主君北條の命に背く稚心に此
理を辨へ自身に切腹するならば我
は油斷の誤りばかり、兄が義も立ち
弟が忠も立ち、双方全き此役目は、
御苦勞ながら母人密に小四郎に腹切
せて下されかし、現在の甥が命申し
宥めて助けるこそ情ともいふべけれ
殺すを却つて情とは情なの武士の
有様やいかなれば兄弟敵味方と引別
れ今朝の矢合せに敵は甥なり味方は
我子肉身と肉身の劍を合す血汐の瀧
修羅の巻の攻太鼓、胸に磐石こたゆ
るつらさ、弓馬の家に生れしふせう
聞分けたべ母人と事をわけたるもの
がたり、母は手を打ち尤々、兄の
そなたも弟の高綱も我子に依估はな
けれ共、隔て居る程不便もまさり、
有やうはそなたにも心を置いて居まし
たが弟に不忠の悪名を付さすまいと

左程まで心づかひの深切、ヲ、忝
いぞや、嬉しいぞや、世の喩にも小
の虫を殺して大功を立てる事眞實眞身
は子よりも可愛い孫なれ共、思ひ切
て切腹させうヲ、お出かしなされた
健氣者とは見ゆれ共、稚き小四郎若
し小腕に切損なはゞ母人宜しう御介
錯早や短日の暮近し、佐々木兄弟が
苗氏を穢すか名を上るか二つのさか
い涙ばしかけ賜ふな、氣遣ひめさん
な後れはせぬ、必ず氣強ふ遊ばせと
わたす一腰受取る腰のはり弓に詞つ
がふて別れ入、岸吹通す木枯に早園
城寺の鐘諸共誘はれ來る白羽の矢、
紅葉のしげみに射込しは、主を誰共
人目せく、陣笠まぶかに篝火が男出
立の半弓にやはか仇にはかへらじと
陣屋間近くしたひ寄、和田殿の供廻
りに紛れ込爰までは忍び入たれど用
心堅き陣屋の木戸口、心を通はす矢

文の謎、小四郎が目にかゝれかし、
 祝ひ祝ふた初陣にいたましい繩目の
 恥、外の手でも有事か従弟同士の小
 三郎、憎てらしい手柄顔、甥を縛ら
 せ伯父の身でそれが本意かうらめし
 い、どふして居るぞ只一目、見た
 逢たい間の戸に我身をひしと楯板も
 通すは涙の矢數なり、もれてや奥に
 聲高く侍中へ夜廻り怠り申されな
 と、女の聲も敵の中、胸驚かれ篝火
 は差足ながら忍び行く、障子さつと
 目早の早瀬紅葉の矢文拔取て、つく
 へ、眺め扱こそへ羽響もなき忍び
 の矢、女業と推量に違はぬ手跡、状
 の文體にも有らず、名にしおはゞ逢
 坂山のさねかづら人にしられてくる
 よしもがな、と古歌を書しは、ム、
 へ手は見知らねど、相嫁の篝火、
 囚はれの小四郎に此陣屋を抜け出て
 人しらずくるよしもがな爰は所も近

江路や、世に逢坂の關の戸を明て逢
 んとしらせの謎エ、侍の母の様に
 ない、未練なきもししい軍に立ば討死
 は覺悟の前と、立派な小四郎に悪氣
 を付け若取逃しやなどしたら其不調
 法は誰にかゝる、一家の誑は生捕つ
 ても命に別條ない様子、知らせて安
 堵さす程に必ず爰らに狼狽て、親子
 一所の繩目を受け夫の名まで汚しや
 んなと恨の裏の反古文、打返したる
 返事の古歌、矢立の硯さらへと書
 認めてくまり付け、内にも人目重藤
 の弓打つがひ陣外の小松にひやうと
 手ごたへと俱に立切障子の内、稚心
 に油断せぬ繩付きながら小四郎は、
 そつと一間を忍び出、今おは様の讀
 しゃつた、矢文の手は母様、爰を抜
 て戻れとの、しらせは聞ても敵の中
 見とがめられては恥のはぢ、とはい
 へ母様どこにござる、死ぬ共ちよつ

と顔見たや、とそろりへとぬきあ
 しも危き毒蛇の陣の口、あはや後よ
 り窺ふ微妙、小四郎待やと聲に恟り
 ア、イどつこへもいきや致しませぬ
 御赦されたとばかりにて、わなへ
 ふるふ有様をつくへ見れば見るに
 付、同じ佐々木の血筋でも扱も果報
 の拙い子や、囚人の身となつたれば
 子心にも氣おくれして、身すぼらし
 い顔形、今宵限りの命とは言ねど虫
 が知らずかと、思へばそぞろ先立つ
 涙、胸に押さげなでおろし、ヤレ孫
 よ爰へおじや、コレそなたのばぢぢ
 やはいの、器量骨柄揃ふた子にいた
 へしいこの繩目、といてそなたに
 此婆が言聞す事有と立寄ほどく血筋
 の繩、子ゆゑに引れ篝火が又立戻る
 陣屋のまへ、矢文の返事は、嫂の早
 瀬の手跡行くも歸るも別れてはしる
 も知ぬも逢坂の關とは時節を待との

事か、いかにと見やる戸の透間、微妙は孫の手を引て一間の障子押開きノウ小四郎高綱に別れてから十三年の年月孫有とは聞たばかりなつかしさ逢たきは膝元で育つた小三郎より顔見ぬそなたの不便きは百倍、殊更長の浪人の貧しい中に育られ武器具迄も無不自由に口惜しう暮しつらんと思ひやる程片時も忘るゝ隙はなけれ共、思ふに任せぬ敵味方、此上下はばゞがそなたへ引出物、着てたもやいのと差出せば何心なく押いたゞき取上て不審顔、申しばゞ様此上下にはなぜ紋がござりませぬ、九寸五分が添てあるは高名手柄せよと有、首掻刀でも有まいこりや私に腹切れとの死装束でござりませぬ、悟る惻涙に驚く篝火、微妙はがばと泣倒れ暫し詞もなかりしがヲ、追は親の子程有る、人に勝れて其様に開分よい

程助けたきは胸一杯にせまれ共、殺さにやどふもならぬといふは父親の高綱が武勇智謀の勝れたがそなたの身の仇敵、助けよとある、北條殿は子を入質に高綱を降参さする謀それまでは殺しもせずまして助て歸しもせず、いつ迄も陣中に捕へて置との主命生て居る程高綱が武勇の妨爰の道理を開分て潔う腹切てたもエ、見れば見る程目付なら鼻筋なら眉に一つのほくろまで父親に似よふ智恵才覺まで違はぬもの、老先も見ずむざゞと苔の花をちらすかと老の練言涙の鹹あまもれて外面に開嫁の何ぼ道理でも餘り氣づよいお袋様、我子は殺さぬゞと延上れ共芝垣の隔つる中ぞ是非もなき、母の心の通じてや小四郎おとなしく手をつかへ私が命一つでとゞ様や伯父様の手柄になる事なら、何の惜みは致しませぬ

尤も腹の切やうも稽古して置たれば切損ひもせまいけれど、私が一つの願ひ、昨日軍の初陣に直に敵へ生捕れ、此儘死るは弓矢神の冥加にも盡たか何ぼう悲しい口惜い、どふぞ最一度お歸しなされ、とゞ様かゞ様にたつた一目逢た上、せめて雑兵の首一つ取て立派に死で見せませふ、此お願を、ア是なふ賢い様でも追は子供、預りの囚人敵へ歸して盛綱が武士が立ものか、とゞやかゞに逢される程なれば此憂目はないわいのとはいふものゝ逢たいは道理じやわいの尤ぢや、世が世の時なら二人の孫右と左に月花と並べて置て老の樂み此上もあるまいに生捕るも孫捕られるも孫、小三郎が手柄したと騒ぎ立つる真中へ縛られて引出されし顔見た時の姿が胸は、はり裂く様にありしぞや、とても甲斐ないそなたの運

最期が未練にあつたなど、口の端にかけられては親高綱が弓矢の名おれ尋常に死でも、ヤ、介錯はこのばい、可愛孫を先立て、いつまで因果の恥さらそふぞ、ばいも直に自害して三途の川を手を引て渡るはいのと抱しめなく、劍差つくれば只二親に逢ふまでは赦して下さればと様と未練も親子の恩愛に道理といと、目もうるく、孫もうるく、透有ば逃んと見やる木戸口の爰にと母の呼子鳥ヤアか、様かと飛立つばかり、かけ出す孫を引き留てせき立老母の聲あらゝか、エ、未練者、卑怯者、扱は母親と内通して爰を抜て出る心じやな、それなれば猶助けられぬ、望の通り親にも一ト目逢したれば、サア

様の聲聞てから一倍命が惜ふなつたどふぞ助けてお情じや、勘忍して下さりませアレイ、と逃げ廻りおくれる孫に猶氣おくれ、ヤレ最前の健氣な覺悟忘れしか、とても叶はぬ期になつて、憶病者の名を取るかや、伯父が見ぬ先自害して、立派な最期と譽られてくれ、ばいが方から手を合す頼むといへど逃まどふ外にはむごやつれなやと恨は三方三惡道、前生の敵同士がいとしかはいの孫や子に生れて憂目を見するかと老母がしんみの血の涙、時雨の中の枯紅葉露より先にちりぬらん。

(床本) 盛綱首實檢の段 (後)

やどこへ、知れた事我子の小四郎取返す、ならぬ、相嫁の初見參長刀に乗りたいか、イヤ推參など、ぎしみあふ眞中に三郎兵衛小四郎小脇にひんだかへ石山の御陣所に事有りと覺るぞ、ヤア、小三郎は何處に有るハア則ち只今御加勢と、用意の小具足甲の緒しむる間遅しとかけ出す引違へてしらせの軍卒馳參じ時政公の計略の如く佐々木四郎左衛門高綱我子を取られし憤り今宵自身に馬を出し手勢漸々二千餘騎、鎌倉の總大將時政公に直見參仕らんと死もの狂ひの共有様、鬼神の如く見候、併味方は兼ての用意、大將の陣は數萬の警固、盛綱公には氣づかひなく擒の悴を守護あるべしとの御事也、猶追々に御注進と申し捨てぞかけり行く、三郎兵衛大息つきハ、アなむ三寶しなしたり、さしもぬからぬ弟高綱子

折からさつさと山風の遙に陣鐘攻太鼓事こそあれと早速の早瀬、長刀かい込走り出、木戸押開けばかけ入る篝火、待た、高綱のおかもぢこり

故の闇に心くらみ、謀に陥たるな、
摩利支天なればとて、數萬騎の其中
へ一騎がけの死軍、討死せんこと眼
前たり、此上は親の御慈悲佛間で御
回向なされかし、盛綱母人エ、力な
き武運の末、残念さよと斗りにて、
眼を閉ぢて奥に入る、篝火猶も氣は
そゞろ、我子も氣遣ひ夫もいかゞ千
々に碎くる軍の波、ゑいゝおふと
勝鬨は敵か味方か二人の妻、胸の陣
鐘足も空二度の注進勇の大音、御悅
び候へ。軍は十分味方の勝利、大軍
に取圍れ集り勢の高綱方途を失ふて
逃走るを或は怪首或は射取り殘る兵
さんんに追まくり、諸葛孔明と呼
れたる四郎左衛門高綱を榛谷はんがの十郎
が討留て候と附より妻はハアはつと
心散亂もへ立つ篝火、夫の首は渡さ
じと行をやらじととむる早瀬、大
將軍時政公、御成ぞと呼はる聲、ハ

アはつと早瀬は大將の御座のもふけ
と走り入る龍の雲に冲るが如く、一
陽の春を待つ 平時政、近習の武士
古郡新左衛門、佐々木小三郎盛清御
供に扈從して、御召がへの鎧櫃御座
の次に飾らせて、寛然と入賜へば、
三郎兵衛母微妙、敬ひ請じ奉る、
竹の下の孫八、あはたゞしく罷り出
最前和田兵衛秀盛御陣所へ参りし所
日頃好める酒をしいて酔ひ伏せ居間
の四方に金網をかけたれば龍の鳥回
前と思ひの外のしれ者、隠し火矢を
以て屋根を打抜き御座の間の白旗を
奪ひ取り立退て候と言上すれば時政
公ハ、敵の軍中へ鎧も着せず只
一人踏込程の不敵者汝等が手に合べ
きか、第一の大敵佐々木四郎左衛門
を討取たれば腹心の害は拂ふたり、
さりながら、此佐々木、古への將門
に習ひ一人ならず二人三人の影武者

有ていづれを是と見わけがたし誠の
佐々木か偽首か 弟が首よも見損ふ
まじ兄盛綱實檢せよと仰せの下に新
左衛門、首桶御前に直し置、三郎兵
衛承り、大將に一禮し無慙の 弟が
死首に、是非もなき對面やと吞込む
涙後ろより父の死顔拜まんと窺ふ小
四郎盛綱が引明る首桶の二目共見も
わかずと様嘸口惜かる、わしも後
から追付と水の刃雪の肌、腹にぐつ
と突立る、ヤレ母人お留なされ、何
故の切腹、仔細をいへ、様子はいか
にと人々あはて介抱に、小四郎きつ
と目を見開き、何故死とは伯父様共
覺へぬ卑怯未練もと様逢たさ、
父を先立て何まざりと生恥をさら
さん、親子一所に討死して、武士の
自害の手本を見せると、きりりと
と引廻す手に縋り母微妙ノウ其立
派な心をしらず、呵つたばどが面目

ない、こらへてたもと右左目をしばたゞく三郎兵衛猶豫は如何に早實檢何と〜と御詮意に疵口拭ひ耳際までとつくと改め古實を守り、謹で兩手に捧げ矢疵に面体損じたれ共弟佐々木高綱が首、相違御座なく候と御前に直し押し下ればおゝウ骨肉の兄が實檢と言い首に向つて小四郎が恩愛の涙切腹の有様、誠の首の證據明白、思へば昨日は此首に後を見せし時政が今手の下に誅罰する我武運の強さ、ハア心地よや嬉しやな、今といふ今時政が初めて枕を安く寝るは盛綱が働き、我着替の鎧一領當座の褒美に残し置く、小三郎其方には陣中にて勝軍の恩賞せん、皆萬歳を唱へよと悦喜の粧ひ傍を拂ひ本陣さして歸陣有り、盛綱邊をとつくと見廻し佐々木高綱が妻篝火、計略の偽首仕畢たれば小四郎に最期の暇乞、

救す是へと一言を聞開遅しと轉び出我子にひしと抱付、わつと泣より外ぞなき、なみだながら母微妙偽首と知て大將へ渡したそなたは京方へ味方する心底カイ、ヤいつかな心は變ぜねど、高綱夫婦が是程まで仕込だ計略、父が爲に命を捨る幼少の小四郎が、あんまり神妙健氣さに不忠と知て大將を欺きしは弟への志、彼が心を察するに高綱生きてある中は鎌倉方に油断せず一旦討死せしと偽はつて山奥にも姿を隠し不意を討んず謀然れ共底深き北條殿一應の身替りは中々喰ぬ大將、そこを計つて一子小四郎を、うま〜と此方へ生捕せしが術の根組、最前の首實檢偽首を見て父上よと誠しやかな愁嘆の有さまに大地も見ぬく時政の眼力をくらませしは教も教たり、覺へも覺へし親子が才智、みす〜偽首とは思

へ共ケ程思ひ込だ小四郎に何と大死がさせられふ主人を欺く不調法、申し譯は腹一つと極た覺悟も負た子に教られ淺瀬を渡る此佐々木、甥が忠義にくらべては、伯父が此腹百千切つてもかけ合がたき最期の大功そちが命は京鎌倉の運定め出かいたな出かしたと手負の顔を打守り〜悲嘆の涙にくれければ、篝火いど〜かきくれて、子を譽られる親の身の、悦ぶは常なれど、生て高名手柄して、今の仰に預らば何ぼう嬉しかるべきに、年相應より惻愍なが生れ付た此子が因果、いかに武士の習ひじやとてかう〜して自害せいと教る親の朋慾さ、かはいや初陣の初めから、死に行く事合點しておりや侍の子じやによつて、討死するは嬉しけれど死だらと〜様やか〜様につい逢事がなるまいかとそればかりがと言さ

して泣顔見せずいさんで行し其立派
き、天晴弓矢打ものまで誰におとら
ぬ物覺へ腹切る事まで是程に器用に
なくば何事ぞコレなふ小四郎くくと
手負の耳に口差寄せ此深手じやもの
耳も遠なる目も見へまい今伯父様の
おつしやつた事聞取やつたか、そな
たの命捨たので高綱殿の忠義が立と
褒美のお詞それを未來の引導に迷は
ずと佛に成てたもといひ聞すれば嬉
しげにそんならわしが死るのでと、
様の軍が勝になるかエ、忝いば、様
はどこにぞ、わしや縛られても卑怯
じやないぞへ、それで死でも本望じ
や伯父様おぼ様ば、様にもか、様に
も逢て死るは嬉しいが、たつた一つ
悲しいはと、様にくくと後は得言は
ず舌こはばり次第くくによはり果惜
や蕾の初花も無常の風にちつて行、
コレなふ小四郎孫やい今はの際に父

親を尋ねて死だ子の心、思ひやつて
只一ト目なせ顔見せに來てくれぬ、
千騎萬騎の大將にも成べきものを梅
檀の二葉で枯せし胸慾は神も佛もな
き世かと歎く微妙の聲限り涙の早瀬
篝火も消ゆるばかりの思ひなり、三
郎兵衛泣く目を拂ひハア歎きに紛れ
おくれたり實檢を仕損じたる鎌倉へ
の申譯母人さらばと差添に手をかく
ればヤアく盛綱、和田兵衛秀盛是
に有り敵を見かけて自害とは慮した
るかと聲かけられシヤ幸のよき敵歸
らば其まゝかへさんに運つきたる秀
盛、逃しはせじとつつ立てばヲ、和
田兵衛が習ひ得し南蠻流の懐鐵砲受
て見よとどうと打つ、ねらひはそれ
て鎧櫃内に忍びし棒谷十郎太腹射抜
かれのた打つたり見よや盛綱底の底
迄疑ひ深き北條の隠し目付、汝が手
にかけざれば不忠にあらず彼めが不

運今又御邊自害せば鎌倉への義は立
べきが佐々木が首は偽物なりと忽ち
露顯し是までも碎きし心は水の泡、
時を待て佐々木高綱誠は爰にと切て
出る其時に潔く切腹せば忠も立ち義
も全し腹の切様早い、ハ、アげ
に誤つたり我命暫く生るは弟へ是も
情けの一つには明への寸志追善供養
野送り萬事も一家の内證、諸事何事
も此座切り表は京方鎌倉方、右大將
實朝の御座の白旗奪取しは軍の吉左
右重ねて再會、留て見ぬかと出て行
くヤア盛綱が陣中にて味方の武士を
討つたる曲者返せ戻せは弓矢の儀式
ちなみは兄嫁小姑孫よ明子の亡骸に
憂事三井の晩の鐘消え行く子より親
心我から先の夜の雨、父には一ト目
粟津の嵐、木の葉の紅葉かきよせて
夕べを照らす勢田の橋、門火は狼煙
敵味方さらばとばかり別れ行く。



ほろ

紙の國屋小春
紙屋治兵衛 天網島

北新地河庄の段
ちよんがれの段
紙屋内の段

北新地河庄のだん

中 竹本文字太夫
豊澤新左衛門
切 竹本津太夫
鶴澤友次郎

人形

紀國屋 小春 桐竹紋十郎
紀國屋 仲居 桐竹紋太郎
女 郎白菊 吉田文之助
河庄 女房 吉田小兵吉
江戸屋 太兵衛 吉田玉幸
五貫屋 善六 吉田玉徳
粉屋 孫右衛門 吉田玉藏
紙屋 治兵衛 吉田榮三
河庄 亭主 吉田兵次
見物 人 大ぜい

享保五年十月十四日(二三八〇)十夜回向の夜大阪天満の紙屋治兵衛と曾根崎新地の紀の國屋の抱へ小春とが網島大長寺で佛の教に安心立命して情死を遂げた事實談をすぐさま脚色して同年十二月六日から竹本座の舞臺にのせたのが、近松門左衛門作「心中天網島」全三段で、これを土臺に、その後種々の改作が出た——例へば寶曆五年七月(二四一五)豊竹座上演の「双扇長柄松」(並木永輔他)、明和六年七月(二四二九)竹本座上演の「中元噺掛鯛」(三好松洛他)、安永七年四月(二四三八)北

の新地竹田萬次郎座で興行された「心中紙屋治兵衛」(近松半二、竹田文吉)等で、改作物としては半二のものも最も勝れて居り、近松の原作を増補改修して舞臺を賑はし、筋は複雑に技巧的になつた。寛政以後は「増補天網島」の藝題で専ら上演され、歌舞伎でも、この方が演じられることになつた。「河庄」、「炬燵」など)此度のもも半二改作に依るもので、その筋は紙屋治兵衛は舅五左衛門の爲めに少からぬ金子を融通したが、わざと茶屋酒に浸つて自ら消費した様に見せかけた。そのうちに曾根崎新地紀の國屋小春といふ遊女と馴染を重ね、今宵も揚屋の河庄で江戸屋太兵衛と身請の張合ひ。小春は死ぬほど惚れた紙治様だが、其の兄の粉屋孫右衛門や女房のおさんに泣いて頼まれ、涙を吞んで治兵衛

に愛想づかし、治兵衛は腹を立て、
歸る。小春は一人で死ぬ氣であつた。

紙治の宅では女房おさんは炬燵を温
めて待つてゐた。死ぬほど思ひつめ
た男と切れるといふ小春の心底を思
ひやると、おさんは自分の義理が濟
まなくなり、衣類身のまわりのもの
を入質しても小春を家に入れ、自分
は子守りなりとして三人仲よく暮し
たいと言ふ。治兵衛も女房の貞節に
泣き、小春の實意も見えて今は板挾
みである。所へ戀敵の太兵衛が小判
を鼻にかけるのが癢にさわり、つい
刃物三昧に及んで人殺しの罪を犯し
てしまふ。繩目の生き恥をさらすよ
りはと、丁度死出の旅路の暇乞にき
た小春と手に手を取つて大長寺を指
して死に行く……と云ふのです。

(床本) 河庄の段 (中)

よねが情の底深き、是かや戀の大海
を、かへもほされぬ蜷川、思ひ／＼
の思ひ歌、心がこゝろとゞむるは、
門行燈の文字が關、浮れぞめきの仇
淨瑠璃、役者物まね納屋端唄二階座
敷の三味線に、引れて立寄る客もあ
り、紋目道れて顔隠し仕過ごしせじ
と忍び風、橋の名さえも梅櫻、花を
そろへし其の中に、南の風呂の浴衣
より、今の新地に戀衣、紀の國屋の
小春とは、此の十月に仇し名を、世
に残せとの印かや、今宵は誰が呼子
鳥、覺束なくも行燈の影、行違ふよ
ねの立歸りや、小春様のなんどの
氣色も悪いか顔も細り、いこふやつ
れさんしたのふム、ほんに誰やらが
咄で聞ば紙治様故内からたんと客の
吟味にあはんしてどこへもむざとは

送りぬのイヤ太兵衛様に請出され在
所とやら伊丹とやらへ行んす筈共聞
及ぶが、どうで御座んす、ア、モ伊
丹／＼といふて下さんすな、夫では
いたみ入るわいなア、いとしほなげ
に紙治様と私が中左程にもない事を
アノぜいこきの太兵衛めが浮名を立
て、いひ散し、客といふ客は退き果
て内からは紙屋治兵衛故ちやとせく
程に／＼文の便も叶はぬ様に成やし
た、ふしぎに今宵は侍客で、河庄方
へ送らるゝが、斯う行く道で若し太
兵衛めに逢ふかと氣遣ひき、ホンニ
もう敵持同然の身持ちやわいな、ム
、そんならちやつとはづきんせ、
アアレ／＼一丁目からのんに髮結
てのうらしい立衆自慢といひそふな
男たしかに太兵衛様と見た、アレ
／＼愛へといふに小春はム、すかん
コレ／＼こなきさんそこへ頼むぞへ、

宵の中は往來にまぎれ人連れずにな
しや河庄へ行ぞへ、ム、よかるノ、
爰へ太兵衛様が見へたらばわしがち
よつぼくさ、サアノ、此間に行かし
やんせと、おゝひに成たる其隙に人
立紛れにちよこノ、走りとつ河内屋
へ駆け込めば、ム、これはノ、マア
ノ、早いお出で、ホンニお名さへ久
しう云はなんだに、ヤレノ、珍らし
い小春様、はるノ、で小春様と、主
の花車が勇む聲、ア、コレ門へ開え
る高い聲して小春ノ、といふて下ん
すな、表へいやな毛虫客が来るわい
な、密にノ、頼やすと、云も洩てや
ぬつと入来る二人連、アイヤコレ小
春殿、毛虫客とはよい名をつけて下
んした、先おれから云ませふかい、
ヤコレ善六、我も知つて居るこの小
春、頓て太兵衛が女房に持つか又紙
屋治兵衛が請け出すか張合の女郎ぢ

や、マア近付になつておきやと、の
さばり寄れば、エ、聞ともないノ、
ノ、えしらぬ人の浮名を立て手柄
にならばせい出して云はんせノ、
この小春は聞ともないと、つひと廻
ば又摺り寄、ア、コ、コ、聞きとむ
なく共、へ、小判の聲で聞せて見
せふが、又貴様もよつぼど因果者じ
やわい、天満大阪三郷に、男も多い
に紙屋治兵衛二人の子の親、女房は
従弟同士、舅は伯母、聲あいノ、に
問屋の仕切さへ追るゝ商賣、夫れに
まあ十貫目近い銀出して、イヤ請出
すのヤ根引のとはソリヤコレ蟻螂が
斧でござりやすて、ハ、ハ、ハ、其様
な男がやつぱり可愛ござりやすか、
イヤサお前は治兵衛様が可愛ふござ
りやすかいな、我等女房子なければ
舅もなし、又伯父も持たずへ、ン身
すがらの太兵衛と名を取つた男、色

里で借上いふ事は治兵衛めには叶は
ね共、ハテ銀持た計は太兵衛がまさ
つた、銀の力で押たらばノウ善六、
何に勝ふも知れまいわい、今宵の客
も大方治兵衛めぢや有ふ、サアもら
をノ、ノ、小春はこつちへもらをヲ
、此みすがらがもろうたぞ、サア花
車酒出しやいのノ、ノ、ム、何を
しやんすやら、今宵のお客はお侍衆
追つけ爰へ見えませふ、お前はどこ
ぞ脇で遊んで下さんせ、ヤ侍客ぢや
侍何ぢやノ、へ、何の刀さすかさ
んか、侍も町人も客は客ぢやわい
何ぼさしても五本六本はさすまいし
よふ差て刀脇差たつた二本ぢやわい
二本差がこわいかいノ、二本差が
こわけりやなア田樂屋の門を通れん
じやないかい、ハ、ハ、ハ、イヤコレ
花車、此頃仲衆仲間のはやり文句、
コ、コ、小春もよふ聞きや、ヤコレ

ヤ善六そこへまアわれ覺えた通り、
やつて見い、ヲツト承知の助ぢや、
やるゝが素ではちつと間がぬけて
やりにくいな、ム、太兵衛様、おま
はん、ずるてんあらふてんか、エ、
ずる天、ヲ、ヨシゝ、ム、幸こゝ
に縁がある、是でやつてやろう、エ
、ほうきハ、えゝ三味線ぢやなア
ドレゝ鳥渡拜見のいたそふヨヲし
ゆる胴に竹の丸ざぼとけつかるわい
ハ、サ、サ、皆に聞かすのぢ
や、一ばいに張込んでしつかりやつ
て呉れゝ、ウツなら一寸調子聞し
て三味線弾左の方へすはりんか、ア
、わりに不器用な男ぢやなア、エ、
何かすぞい、サアゝ早ふやつて呉
れそんなら一寸調子聞かしてんか、
ヲツトこんでゝマア一聞かして
んか、一をヨシソリヤ一じやぞドン
ゝゝゝ御堂様の太鼓のやうな

音ぢやなアハ、サア二二、二か
へ、ヨシゝドンゝゝゝア茶
屋の段ばしご登つてゐる様な音ぢや
な、アハ、三聞かして、三をヲ
ツト三ぢやなア、ヨシゝテンゝゝ
ゝゝゝア、まるで紙屑屋のおんど
くぢやがな、てんごいはずとサ、
、やりまつせゝ、しかし一寸口上
云ふは口上をエヘンゝゝゝ、
東西ゝ此所にて語りまするは、紙
屋治兵衛、紀の國屋小春、つまらん
菊浮名の蜷川、相勤めまする太夫、
竹本善六太夫、三味線さぐり澤太兵
衛様東西ゝゝ、拍子太チヨンゝ
ゝゝゝゝ、ロ三味線アペンゝペ
ペンゝペンゝペンゝゝゝ
ゝペンペンボン、結ぶのペンペ
ンゝゝペンボンゝゝヤペン
ポペンヤペ、神の紙屑に貧乏ボ
コペン紙屋のンヤ治兵衛の女房のお

さんに子の有、其子の涕たれお末に
勘太郎ヲツトドツコイすそ貧乏小春
に命ちり紙の紙子姿ぞ茶袋紙チヤチ
ヤンゝゝゝ、トツト善六もふ
よいゝ、小春殿、何とよい文句で
有ふがのと、悪口難口こらゆる小春
門にも忍ぶ侍客物をも云はず内へ入
太兵衛が胸ぐら捻ぢ上ればアイタ、
、コリヤ何としをる、イヤサ何共
せぬが、この大小が目にかゝらねば
明き盲も同然赦しにくい奴なれ共、
所がら故赦して呉れる、とツとゝ失
ふと突飛されてへらず口、エ、忌々
しいわいゝゝゝ、イヤコレ善六は
から一遍ぞめて來たる、どこぞで
はナソレ、今の紙屑めに逢ふも知れ
まい、エ、うぢんゝせずとサア來い
と身振り計りは男を磨く町一杯には
たかつて、打連てこそ歸りける、所
柄とて馬鹿者に構はずこらへる武士

の客、紙治くくとよしあら、噂小春が身にこたへ、思ひくずおれうつとりと、無挨拶なる折節に内々走つて紀の國屋の杉がけふとひ顔付にて只今小春様送つてさんじた折お客さんまだ見へず、なぜマアとつくり見て來んと酷ふ呵られませ、慮外ながらちよつと、差覗き、ム、そうでない、氣遣ひなし、後詰めてしつぱりと小春様したゝる樽の生醬油、花草さらば後に青菜のひたし物、口合たらん、立歸る、しごくかた手の侍大きに不興し、コリヤ何ぢや、人の顔を目利きするは、身の茶入茶碗にするか、アアなぶられには來申さぬ此方の屋敷は出かたく、一夜の他出も留守居へ斷帳に付、六ツケ敷き掬なれ共、お名を聞て戀ひ慕ふたお女郎、何でも一生の思ひ出おなきけに預らうと存じたに、いつかなにつこ

り笑顔も見せず一言の挨拶もなく、懷で錢よむ様に、扱々うつむいて計りイヤナニ、首筋が痛みはいたさぬか、コレ小春殿く、ハ、ハ、ハ、花車殿茶屋へ來て産所の夜とぎする事はモ終にないずとつぶやけば、ム、いわくを御存じない故にお腹の立つは御道理く、この小春様には紙治様と申す深いお客がござんして、けふも紙治様明日も紙治様とわかからは手ざしのならず外のお客は嵐の木の葉で、ばらくくく登りつめたる揚句には得手怪我の有る物と、せくはどこしも親方のならひ、夫れ故にお客の吟味、おのづと小春様もお氣の浮かぬはお道理く、の中取て主の身なれば御機嫌よかれが道理の肝心かんもふ、サアどつと吞かけわさく、わつさり頼みやす、コレ小春様と云へ共何の返答も涙ほろりの顔ふ

り上げアノお侍さん同じ死る道にも十夜の中に死んだ者は佛になるといひますが定かいなア、夫れを身がする事か、ソリヤ旦那坊主にお問なされ、ム、ホンニそんなら問ひたい事が有わいなア、自害すると首くゝるは定めしこの咽を切方がたんと痛いでござんせうな、ム、痛むか痛まぬか切ては見ず大方な事問つしやれ、ア、小氣味の悪い女郎ぢやと道の武士もうかぬ顔、コレ小春様初對面からあんまりな、御挨拶ちつと氣をかへ奥で酒に致しませふ、いか様酒は能くござろふ、ヤナニ小春殿お來やらぬかな、サア小春様、お出でいなアコレ奥へお銚子持つておぢやと、高い調子は合ねども引立てられて是非なくも打連れ奥へ入にける。

(床本) 河庄の段 (切)

天満に年経る。千早振。神にはあらぬ紙様と世のわに口に乘斗り。小春に深くあふぬさのくさり合たる御注連繩。今は結ぶの神無月、堰かれ逢れぬ身と成果、あわれ逢瀬の首尾あらば夫を二人が最期日と名残りの文の云かわし、毎夜くく死かくご、魂抜てとぼくうかく身を焦す、煮賣屋で小春が沙汰、侍客で河庄方と耳に入よりサア今宵と、覗く格子の奥の間に、客は頭巾の顔の、動く斗に聲聞へず、可愛や小春が燈火に背けた顔のアノ瘦た事わいの、心の中は皆おれが事、爰に居ると吹込で連て飛なら梅田か北野、エ、知らせたい呼たいと心で招く氣は先へ身は空蟬の拔殻の格子に抱付あせり泣、奥には客が大欠び、思ひのある女郎

衆のお伽で、イヤモとんと氣がめめる、門も静な端の間へ出て行燈でも見て氣を晴さふ、サアござれと連立出れば、なむ三寶見付られじと身を忍び隠れて聞共内には知らず、なふ小春殿、宵からのそぶり詞の端に氣を付くれば花車が咄しの紙治とやらと心中する心と見たヤサ違ふまじ死神の付た耳へは意見も道理も入まじとは思へども去とは愚痴のいたり先の男の無分別は恨まず一家一門そなたを恨み憎しみ萬人に死顔さらす、身のはぢ親はないかも知ねども、若しあらば不孝の罰、佛はおろか地獄へもコレマあたゝかに二人連では落られぬ、ヤくア、勞はし共笑止共一眼ながら武士の役見殺しに成がたし、コレ定めて金づく、五兩十兩は用に立ても助たし、何と死る氣に違ひはあるまいがの、神八幡侍冥利、

コレ他言せまじ小春心底残さず打明きやれ、サ、どふじやくと囁けば手を合せ、エ、忝いありがたい、馴染よしもない私、御誓言での情のお詞涙がこぼれて嬉しうござんす、ほんに色外にあらわると、お前様の推量の通り紙治様と死る約束、親方にせかれて逢瀬もたへ差合あつて、いま急に請出す事も叶ず、南の元の親方と爰とにまだ五年ある年の内人手に取られては私は元より主は猶一分立ずいつそ死でくれぬか、エ、死ましよと引に引れぬ義理詰に、ふつと言替し首尾を見合せ相圖を定め、抜て出よふ抜て出よといつ何時を最期共其日送りのあへない命、私一人を頼みの母様、死だ後では袖乞非人の飢死もなされふかと、是のみ悲しき私連も命は一つ水くさい女と思し召のも恥しながら其恥を捨て、も死

共ないが第一死ずに事の濟様に、どふぞお前を頼みます、と語れば頷き思案顔、外には、つと聞て驚き、思ひがけなき男心、木から落たる如くにて氣もせき狂ひ、エ、扱は皆嘘か二年と云ふ物化された根性くさりしアノどう狐踏込で一討か、顔恥かゝせて腹いよかと、齒ぎりぎり、口惜涙内にも小春が託ち泣、コレ申モ卑怯な頼み事ながら、お侍様のお情に今年中來春二三月の頃迄も私に逢て下さんして、彼男の來度毎に邪魔に成て期を延し期を延せば自ら手を切て先も殺さず、私も命を助る道理何の因果で死ぬ契約した事ぞと思へば悔しうござんすと、口と心は裏表絞る袂は雨露の膝にもたれて泣き居たる、ア、閉屈たそなたの願ひ、コレ風もくる人や見ると格子の障子はたゞと立聞治兵衛が氣も狂亂、エ

、流石寶物やすずめ胴性骨見違へしエ、口惜や切らか突ふかどう障子に移る二人の横顔、エ、くらわせたいはりたひ何ぬかすやら頷き合、拜む囉くほへるさま胸を押へさすつてもこらゑられぬ勘忍ならぬと心もせきに、せきの孫六一尺七寸拔放し、格子さきより小春が脇腹爰ぞと見きわめぐつと突に、座は遠く是はと斗怪我せな透さず侍飛かゝり兩手をつかんでぐつと引入刀の下緒手ばしかく格子の柱にがんどがらみにくゝる内立歸る此の家の夫婦、ヤア是はとばかり驚けば、苦しうない、障子ごしに拔身を突込あばれ者腕を格子に括り置たれば、氣づかない事はない、そなた衆は小春を連て奥へ行きやれ、身共はアノ狼藉者、何故斯様の狼藉をいたすぞ詮議するサア、早く奥へ行きやれ、イエ、お

前斗爰に置ましては危うござりますイヤサコリヤ人立あれば所の騒ぎ大勢が立合口論に及べば武士の立ぬ様に成るまい物でもない、と云も遊所故身も忍びの遊興、よい、身共斗り爰に居て氣づかひなら、いつしよに奥へいかふ、小春、おじや、いて寝よふアイあいとは云ど見知ある脇差のつかれぬ胸にはつと貫き、治兵衛様何が何とイヤサア慈悲と云事がなければ人は難儀をするげな餘まり酒を過して色里にはあるならい、沙汰なしに、いなしてやらんしたらナア、河庄さん、わしやよさそうに思ひます、いつそ此繩といて、アコリヤ、其繩とくなく、括り付しは仔細あり、身次第にして皆奥へ夫れでもお前ハテ構はずと小春おじやいのと、打連立て奥の間の影は見ゆれど括られて格子手柵にもがけばし

まり身は煩腦に纏がるゝ犬に劣つた
生恥を、覺悟極めし血の涙絞り泣こ
そふびんなれ、ぞめき戻りの、身す
がら太兵衛、善六伴ひたち歸り、ヤ
イコリヤヤイ、こうし覗いてけつ
かるはどいつじやい、エ、いや
みたやつじやな、コリヤ頬かぶり取
れ、エ、ほうかぶり取りやがれ、
治兵衛がわれに逢たふて、宵から
一遍尋たはやい、サア甘兩の金戻せ
ム、甘兩の金とは、ヤアとぼけなや
い確な證據と懐の紙入より證文を取
出し、コリヤ是を見い、エ、一つ金
子甘兩也、右は今日入用に付難儀い
たし候所御取替下され候段御慈悲の
程忘れ申さず、あり難く存奉り候何
時成共此手形を以て、きつと返濟申
べく候後はお定りじや、江戸屋太兵
衛殿紙屋治兵衛判こりやわれが直筆
じや、ぞよ、是でも覺へがないか

サア夫は此間石町の御出家に、ヤア
どこへぬけ、と、そふわ抜き
せぬ、コリヤ證文が物云ふはやい、
何じや逢たい、逢たいとは誰に逢ひ
たい、ア、コレ、太兵衛さん、ぐ
づ、いふにや及ばぬわいの、ヲ、
そふじや、エ、うしやがれ、ア
イタ、ハ、ハ、善六、ちよ
つと見い、治兵衛がいたいとぬか
すはずじや、コ、これ見いしぱり
付けられてけつかるはい、エ、どこ
にほんにけつたいな、サアこりやま
どふしたんじやろうな、エ、聞えた
扱は盗ひろいだな大騙め、がん盗め
息ずりめと、蹴飛し蹴ちらし、はり
廻し、コリヤ紙屋治兵衛が盗して縛
られたと、呼はりわめけば往來ふ人
邊近所も駆集る、内より侍飛出、善
六を突飛し太兵衛が腕捻上げ、ア
イタ、何とすりや

此治兵衛には仔細あつて某が縛置
己らが土足にかけ盜賊との狼藉已最
前は參る砌無禮を働く泥坊め、サ
ア治兵衛が何盗んだ騙とは何を騙つ
た、サそれぬかせ、ア、コレ、お
侍證據のない事云はふかい、コレ此
證文が確な證據、コレ見やれいの、
何んとわかりやしたか夫れほど恩を
見せた甘兩忝ないと禮はぬかさず、
イヤ坊主じやの、イヤ御出家のと、
間に合をぬかず故、騙と云ふたが誤
かヤちつとそふもあるまい、ドレ其
一札と取にかゝるを孫右衛門透さず
投出す甘兩、太兵衛が顔に打付ける
アイタ、治兵衛が借た甘兩、
エ、ハイ是は、御きんとうさまに
そんならおいたとき申ましようふかい
エ、コリア後で小言を云ぬやう一兩
改て受取おろう、ハイハイ、
申分はないか、イヤモ金請取ば

云分はござりませぬ、云分なくばコ
リヤこうと太兵衛がゑり髪引掴む是
はと立寄る善六を沈んで投付、又起
上る太兵衛をば蹴飛ばし、投ちらせ
ば、ほう／＼起て脱廻し、ヤイおの
いら、よふ見物して叩かせたな一々
に面見覺へた、返報する覺へておれ
とへらず口にて、逃出す立寄人々ど
つと笑ひ、ヤアどつかれてさへアノ
おとがい橋から投て水くらはせやる
な／＼と追かけ行人立透ば侍立寄て
括りめとき頭巾を出捨コリヤ此面を
見よ、ヤ兄者人と逃んとすれば孫右
衛門引止めヤ動きおるまいぬサア
云事がある、うせうと引立内に引据
れば兄者人／＼／＼而目なやと、ど
ふと座し、疊へひれふし泣居たる、
扱は兄御様かいのと、走出る小春が
胸ぐら取て引すゑ、ヤ畜生め狐め太
兵衛より先うぬをと、足を上れば孫

右衛門、ヤイ／＼／＼其たわけから
事がおこるわい、コリヤ人をたらす
は遊女の習ひおうが儂が目には今見へたか
此孫右衛門はナ、たつた今一現にて
逢た女郎の心底を見ぬみて居るわい
小春を蹴る脛で狼狽た其儂が根性を
なぜ蹴ぬ、エ、是非もなや、弟とは
云ながら三十におつかより勘太郎お
末と云六つと四つの子の親六間口の
家を持、身代漬るゝ辨へなく兄の意
見を請る事かい舅は伯母聲姑は伯母
者人親同然女房おさんは我爲には従
妹結び合／＼の縁者親子中一家一門
參會にも儂が曾根崎通ひの悔より外
餘の事は何にもないはい、いとしい
は伯母者人連合五左衛門殿は、にべ
もない昔人かゝの甥子に倒され娘を
捨たおさんを取かへし、天満中に恥
かゝせんとの、お腹立伯母者人の氣
扱ひ、敵になり味方になり病になる

程心を苦しめ、コリヤ儂が恥を包ま
るゝ恩知ずこのばちたつた一つでも
行先に的が立、斯ては家も立まじ、
小春が心底見とゞけ其上の一思案伯
母の心も休めたく、此亭主に工面し
儂が病の根元見届くる女房、子にも
見かへしは尤／＼、心中よしの女郎
ア、お手柄／＼結構な弟を持、人に
も知れし粉屋の孫右衛門祭りの禰り
衆か氣違かついに差ぬ大小ぼつ込藏
屋敷の役人と歌舞伎役者のまねをし
て馬鹿を盡した此刀、おりや／＼捨
所がないわいやい、小腹が立やら、
おかしいやら、あまりの事でエ、胸
が痛いと齒ぎしみし泣顔隠す皺面に
小春は始終むせ返り我身の上はゑも
いはず、兄の意見と母親の心づかい
を思ひやり、みなお道理と斗にて詞
も涙にくれにけり、治兵衛涙を押拭
ひア、誤つた／＼誤りました、兄者

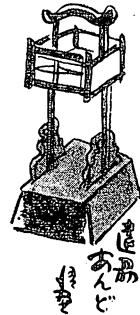
人三年先よりアノ古狸に見入られ親子一門妻子迄そでになし身代の手練れも、小春と云ふ家尻切にたらされア、後悔千萬モ、ふつゝり心残りねば足むきもするまじ、ヤイ狸め狐め家尻切め貧乏神の親玉め思ひ切たと云證據は見よと肌がかけたる守二つ月領に一枚つゞ取かわしたる起證合せて廿九枚、戻せば戀も情もない、コリヤ請取とはたと打つけ申兄者人あいつが方のわれらが起證數改て請取てお前の方で火にくべて下さりませ、ヤア何といふスリヤふつゝりと思切たか、ハイ微塵も心は残りぬなム、ハイ、ヲ、出かした男じや人中で面恥かゝせた孫右衛門血を分た元じやと思へばこそ、よふ思ひ切た嬉しいぞよ、イヤナニ小春殿ちの治兵衛は男でござる、さつぱりと思ひ切ました、今迄は小澤山によふ書て

やつて下さつた、此起證返します、治兵衛が方から何やら書てやつた物があるげな夫をこつちへ返して下され、ハテ今に成て何のうぢ、サ早ふ是か、と懐へ手を指込で守袋引出す一通、ハテおしうもない此紙屑残らずお返しなされと云つゝ讀文見て喫驚ナニ小春殿參る紙屋内、ア、コレそりや見せられぬ大事の文と取付手をとリ孫右衛門、ム、スリヤこな様此狀の客へ義理立て、コレ申兄者人何所の客からきた狀じや、ちよつと見せて、ハテ扱どこの客から狀が來ふと思ひ切た女郎の事、わがみの構ふ事はない、サ、そつちへよつて居や、コレ小春殿最前は侍冥利は今は粉屋の孫右衛門商ひ冥利女房子限つて咄しはせぬ、ア、勤の中に夫程迄イヤサ眞實のないはへ、女郎の常じや、最前の水くさい詞

はこう云狀が來てあるから是じや物道理じや、夫に心中仕て死ふとは思はまいかいあほうではあるはい、思ひ廻せば廻す程おかしいやら不愾なやら餘りの事に涙がこぼれる、ハ、ハ、と笑ひに紛らす眞實は口に云れぬ心の禮、孫右衛門様必ず其文外へ見せて下さりますな起證と共に火に入るコレ誓言に違ひはないア、忝ない、それで私が立ますと又伏沈めばアハ、ハ、ハ、何の儕が立の立ぬとは人がまし、もふこう成からは片時も面が見度うない、サア兄者人歸りましよ、いか様最前からの様子腹が立ふ、サアそんなら同道しませう、サア先へ行きや、ハイ、行きやれ、エ、行やいと云にしほ、立出る、兄者人どうも爰がたまりませぬ、今生のおもひ出にたつた一つあいつが面をと走りよるを、ア

、コリヤ／＼立きはいでどふするの
 じゃ、ハイどふも仕や致しません、
 そんなら、どふもせんならこゝか
 らいうたらよいわい、ハイ何んの口
 でいう斗りでございます、そんなら
 ゑい、ハイエ、ナエ、何んにも言は
 いでもよい事、ヤイ赤狸め儂故に面
 恥かき、足かけ三年と云ふ物戀しゆ
 かし、いとし可愛も、けふと云けふ
 愛想が盡たはいい、たつた此足一本の
 暇乞と顔際はつたと蹴てわつと涙出
 す男氣を思ひやる程堪兼て、もふこ
 りやどふも、いつそ心を打明てコレ
 蹴られふがたゝかれふがそこを
 じつとしんぼうせずば、此狀の客へ
 義理が立つまい／＼がの小春殿と孫
 右衛門に制せられ、ハア、はつと斗
 に泣別れ歸る姿もいた／＼しく、後
 を見送り聲を上なげく小春もむごら
 しきぶ心中か心中か誠の心は女房の

其一筆のおく深くたが文も見ぬ戀の
 道別れてこそは立歸る。



行興慕追郎治鴈村中・年百六千二紀皇頌奉

二月一日初日

毎日午後二時開幕

大阪 歌舞伎座

- | | | |
|------|--|----------|
| 第一 | 河竹默阿彌作
裏表春着伊達織 | 三幕
四場 |
| 第二 | 日本文化中央聯盟主催
皇紀二千六百周年奉祝
榎茂郡藤平夜振舞
食鹽南此補作 | 一幕 |
| 第三 | 御登祿の地に日向嶋
ゆかりも深き | 一幕 |
| 第四 | 本村富子作
鶴瀬道八作曲
日本刀
の神祕小鍛冶 | 三幕 |
| 第五 | 郷田野作作曲二濱出
食鹽南此北衣客案 | 一幕 |
| 第六 | 阿波の粉雪 | 一幕 |
| 第六 | 吉野山雲の振事 | 一幕 |
| 御観劇料 | 櫻 七 十 錢
菊 一 四 十 錢
一等席 一 四 十 錢
二等席 一 四 十 錢
三等席 五 十 錢
（他二各等入場統一圓） | |



ちよんがれの段

紙屋内の段

竹本綴治郎
鶴澤寛治郎
豊竹古鞆太夫
鶴澤清六

人形

紙屋 治兵衛
粉屋 孫右衛門
娘さんのお母
女房 おおき
紀國屋 才兵衛
傳國屋 貴坊
鼻國屋 小春
丁維五左衛門
五貫屋 三衛門
江戸屋 善兵衛
五貫屋 善兵衛
勘戸屋 太郎

吉田榮藏
吉田玉枝
吉田文五
吉田兵衛
吉田玉兵衛
吉田文五
吉田玉兵衛
吉田文五
吉田玉兵衛
吉田文五
吉田玉兵衛
吉田文五
吉田玉兵衛
吉田文五
吉田玉兵衛

(床本) ちよんがれの段

福徳に天満神の名を直に、天神橋と行通ふ、所も神の御前町いとむ業も紙店に、紙屋治兵衛と名を付て千早振程買に来る、神は正直商賣は、所がらなりしにせなり日脚も傾くまがり辻、横町から身すがら太兵衛、ア、治兵衛殿内にか、イヤ内にそふな、サア金受取らふ、こんな贖金は入らぬ、正眞の金返して貰はふサ、今戻せよと上り口は大あざら、ヤコレ、太兵衛そりや何云ふのじや、全體宛名の違ふた金、覚えなければ其場の張合、お侍の世話で二十兩はすましたじやないか、が其時貴様改めて、サイノ、二十兩に違ひはないがマよふ似た正眞には見ゆれど、一兩も遣はれぬ、コ、是を見や、ヤモとんとの胴脉けき間屋の仕切にや

つたら、贖金のしりが破て、此太兵衛迄がうたがはれるわい、治兵衛悪いぞや、エ紀の國屋の小春と、くさりついた二人が仲、揚代にせがまれ、ソレ貴様ざちりは、ソレ居たおれが性としてイヤモ氣の毒でならぬじやによつて、取替てやつた貳拾兩、ハ、アこりや何か侍めと云ひ合せ、此太兵衛をやつたのぢやな、イヤサやつたのじやなア、マめんよふ合點の行ぬざぶじやと思ふたどいつもこいつも悪いやつらじやなサア其侍に逢ふ、治兵衛かたりめを爰へ出せと、そこらあたりへ當り眼コレ太兵衛殿お侍には及ばぬ、一體この貳拾兩は清水の浮無瀬で石町の隠居坊主に思ひも寄らず借つた金、名宛を白紙でやつたが誤り、が太兵衛といふ名宛ではサア借らぬ物がなせ返した、イ、ヤイノ、コレ、贖金

で返せといふ、相對はせんぞよこな恐ろしい言事せずと、五器提ておれが門へ立てやい、へ、ン江戸屋の太兵衛は大金持ちやわい、臺所の餘り物犬の五器の分でも四五人は樂に喰へるわい、エ、こんな事すなやいと、足で蹴返す贖金の、包も切れる腹立涙、ム、そうぢや石町の借座敷隠居坊主といふたも曲者、引ずつて来て面張れとかけ出すを、女房引留めア、コレ、治兵衛様も是程に手を替て仕組みに任組んだ悪だくみ、石町の借座敷に、今迄何のうか、居やう、コレ氣をしづめて下さんせといはれて、詮方なく計り、途方にくれたる折からに、くれぬ門でもこぢつけるちよんがれ坊主の錫杖ふり立、エ、歸妙頂禮どうか如来さんまヤレ、皆様聞いてもくんな、あまりかつへて向ひ婆様ちよつとみたれ

ば後生願ひで、お前の内からくわつ、と後光がコリヤ、又あんなるうるさい事じやに、パイ、パイ、パイ、パイ、エ、時も時とあた聞ともない、返りや、ヤレ、ヤレ、ヤレ、ヤレ、けんどなにかみさん、けん、けん、いはずと、おらが顔見て御亭主、我等が顔をばちよつと御覽じ、ちよつくらちよつと御覽じ、何ぞ思案の種にもなるかい、パイ、パイ、パイ、パイ、ヤアわりや此間の坊主め、よううせしたなアと走り寄り、胸倉とつて引据れば、マ、コレ、親方、コリヤどうするのじや、私は長町の乞食坊主夫を内へ引ずりこんでエ、聞へた、コリヤ何かへ内で諷はして聞く氣か、ム、諷ひませふ、は、是は此頃大評判色里もつばらちよんがれ節、新物のコレ始り、ヤレ、ヤレ、エ、歸命

頂禮おかみさんやんれ、ヤレ、皆様聞いてもくんさい、花の難波の新地の小春に貧乏紙屋の治兵衛がなづんで悪性通ひが杉原紙で節季は斷り仕切はのべ、紙得意は塵紙若い美濃紙内にや小半紙一そくならず二東三文にまけてしまつた、ハ、着類きそげも茄子の淺漬ぬかみそ臭い、内のお嬢にやあいそもこつそり、盆も正月も小春が方へ忍び紙とはコリヤ又あだたるうるさいこつた笑止なこつだにちよんがれもんがれ、パイ、パイ、パイ、パイ、やれ、おやま狂ひに男はぬれ紙小春は青土佐、内儀はけつこな阿房のか、紙、是が今橋うはさの書置、唯へましたるちよんがれ坊主も元は随分おとなしもんだが浮世捨たるずんべらぼうのぼんぼう、坊主も呆れてがが折れました、パイ

く、プウブルくくく、ヤイ
くそりや客と僞り、小春を浮無瀬
へ連れて来て石町の坊主客になり、我
難儀を見て貳拾兩といふ金をかし、
宛名に及ばぬと白紙の一札モ頼もし
そふに取つて置き思ひも寄らぬ名宛
は太兵衛、よふもくたくらんだな
有り様にサアぬかせ、と取付くをふ
り放し、エ、コ、親方く下地
の破れに又破るはいの、ム衣が、何
と云はんす、此わしに、二十兩の金
借つた、ム、ヤこいつは受目じ
やわい、ハ、サアそんなら返し
て貰はふく、マ、何ぢやいけ
つたいの悪い、宿なしのちよんがれ
坊主をつかまえて、覺えもない貸主
呼ばり、エ、返したか返せ、貸た覺
はごんせんぞと鼻も動かぬ白化しら
にせ、亂れねだれの腕まくり、はぜ
る衣のどぶ色も破れかぶれと見えに

ける太兵衛氣味よく尻打叩き、コリ
ヤ治兵衛、せりふが濟んだら金返せ
但し代官所へ行たいかアノ愛な泥棒
めと、立蹴にどうと蹴られても證據
なければ無念をこらへ、拳貫く齒ぎ
しみ齒ぎりスリヤどうあつても此治
兵衛をム、代官所へ引ずつて行く、
サアくうせいと取にかゝる二
人を突のけ走りかゝつて戸棚の脇差
抜んとす、馳け寄りおさん抱き留め
ム、道理ぢやが、マア待て下さ
んせ、お前が短氣な事をして、跡に
残つた二人の子供、私は何となるぞ
いの、ア、イヤく放せくと
逆立半亂、治兵衛待て早まるなど奥
より出る孫右衛門脇ざしをもぎ取て
最前から何も彼も皆聞いた、此場で
太兵衛どんとやらと、アノ坊主めを
打放しや二十兩の白紙の譯が立かよ
ソレ其様に腹立させ、疵付させて事

にする仕打はこれまで何ぼうも有事
ぢやわい、夫でも餘まり、サアよい
と事おれに任しやく、ハテマア下
にぬやいの、ソレおさんこの脇差を
戸棚へと、落付く詞に落付くおさん
天の岩戸の戸棚へ錠マどう濟む事ぞ
と常男の胸はもた付く其所へ小春が
親方紀の國屋才兵衛内を覗いて、へ
エ御免やす、一寸お尋ね申します、
内方に江戸屋太兵衛様、江戸太様は
お出なすてやござりませんか、モい
たつてほんホニくといふお人ム、
太兵衛様爰にかいな、モ一遍と尋た
お前はマアぬつペリとして顔付、コ
レよう駈落をさしたの、サア此二十
兩返しますが埋んだ小春を出して貰
ふオイく才兵衛く、わわり
やマアねとぼけては居ぬかよ、ソリ
ヤ一體何の事ぢやい、エ何の事く
とはテモあつかましい、代物ぢや、き

つとした證據がござんす、ハイ書置があるわいの書置がサア、是讀んで見やんせと太兵衛が側へ突付れば何といふ、スリヤは見りや知れるかい、小春が書置とぬかしや、マどこぞの胸にこたへふと、したり顔に押開き、エ、何々恥しながら書殘し候是迄厚ふお世話になり候身に候へ共いとしいお人の顔立ち申さず、是非なく駈落致しまゐらせ候、エ、いましいげんさいめじやなア、今迄紙治様と深ふお云ひかはし深ふへ、深ふお云かはし遊ばしたの、ヒ、エ何ぢや今迄紙治さんと深ふ云ひかはせしはマ、待よ、せしはじやちつとけつたいなせエ、深ふいひかはせしは皆嘘にて候、ヤア、アハ、誠はほんまに太兵衛様が可愛いにて候、ム、

衛様といふ客知つて居るかい、待なはれや、何でもまう聞いた様な名じやが、エ、こふつと太兵衛、ナア太兵衛様、ム、イヤ返事して居るお前ぢやがな、ム、ほんに私かいなえらいおかしいな、アホ、、、、しかしまアそんなら其氣で楽しんで讀にやならぬ、エ、どこやらじや、ヲツト爰ぢや、エ、是迄面憎うあたりしは、眞實の有太兵衛様に針を持たして何じやいな、此太兵衛に針持してどうするのじや、わしや縫物はしらんがな、ヲ、イ、太兵衛様、ソリヤ取り様が違ふてゐるで、ソリヤ張を持たしといふ事ぢや、エ成程そふかヤ是は下拙が讀違ひ、大きにはどかりさん、エ、眞實の有太兵衛さんに張を持し請出されて、ほんの女夫、エ、ホ、傳海聞いてくれ、ほんの女夫ぢやといやい、

エ、ソリヤ誰といな、私とじやがなアノおまはんとかへ、そふじやがなヲ、嬉しい、ヲ、可愛、エ、シモタ大事の状、しわだらけにして仕舞ふた、ドウ、皺を延してやりませふ、ハア、シイ、ム、何ぢや、ほんの女夫になり末永ふ添通したき願にてわざと難面致し、ヤア、こりや風が變つて來たと、俄に肩入裾のばし、色事しの氣になり、太兵衛がぞくぞく傳海はほくそづく、イヤコレ親方、どうやら甘臭い文句じやなア、誰が聞きたい、サ、早ふ讀で、マ、聞かしやいな、ハレせはしいなハレせはしやの、どうやら胸がどきくと、ヲ、けさは身がぞうとして來た、エ、今まで紙治様に云ふたは皆嘘、誠は主に添ひたい心なれど、所詮添ふては下さるまいと

思ひ諦め、私計り死ぬる心に覺悟決
めり、可愛や私ゆへ死ぬる心に成
つたかい、エ、可愛や、エ、エ
死ぬる覺悟にさだめ候所、どふも心
濟み申さず候故、太兵衛様の存じの
方へ駈落致し、暫く身を忍びり、
若しも願が叶はずば、この品を形見
と御覽下され、せめては御回向願上
げり、南無阿彌陀佛、エ、可
愛や、と大聲上げす、り上げ、
赤子の時に泣た儘二十餘年と六七年
と、七八年の太兵衛がタ、タ、
溜涙御道理様やと傳海がし、かんで
やる貰ひ泣き、身をもむ太兵衛が袂
より落散る狀を孫右衛門拾ひ取れ共
知らばこそ、コレ亭主、わしや小春
が書置見たのでしやくが差込、ヲ、
しんきアイタタ、コレ、傳
海坊貴様の世話にして下さつた、元
は是からヲ、そふじや、太兵衛さ

ん、コリヤ手延にしたら死ぬるぞへ
書置に書いて有る、お前の存じの所
とは心當りがあるかへ、サア其心當
りとはム、まだも木の伊じや、コレ
傳海老も來ておくれ、サア早ふ
と後先委細かまひなくあたふた
出るを孫右衛門、門の戸びつしやり
詞アイヤコレ、太兵衛どんちよつと
待て貰ふ、ヤイ、賣主め用が有そ
こへ出いと云はれて俄に胸ぶるひが
た付膝をふみめて詞ハイ、何にも御
用はない筈じゃが、ヤイ我れが名は
傳海といふな、エ、ン夫が何とぞ致
したかへ、コリヤ清水の浮無瀬で坊
主客になつたわ、併しぢやな、アノ
太兵衛と一つで有ふがな、イエ、
めつそうな、太兵衛様とやらタ
、太郎兵衛様とやら、つひに見
た事もない人、ヲ、其見た事もない
太兵衛が、コレ傳海坊貴様の世話に

して下さつた元は是からヲ、そふじ
や、太兵衛様、手延にしたら死ぬ
ぞへと、うぬは又何で受答ひろいだ
サア夫れはとはまだ、見せる物有
ると、拾ひし手紙押し開き、一寸申
上候、此間浮無瀬にて給りし十兩は
最早此間の勝負になめられて仕舞候
故、今日紙印方にて彼の預り手形の
義首尾よく參り候は、又々十兩御
貸し下さるべく候、直に申すも如何
と御願斯の如くに御座候、太兵衛様
傳海より、何と是でもあらがふかと
問ひ詰められて文句も出ず、落した
太兵衛は後日の難儀と、取にかゝる
をまつかせと入身に成つてかつぎ投
げ、支ゆる傳海肩車、打すえられて
二人はひい、心地よくこそ見えに
ける、孫右衛門猶二人をねめ付けか
たりひろいだ白紙の贋筆うぬらが工
み有り様にサアぬかせ、ぬかさにや

箒と振上げれば、ア、申す、ぬか
 します、アイ太兵衛さんに頼ま
 れて、坊主客になつたわ、用水桶の
 底抜ハイ、みづからぢやわいな、ヲ
 、そふで有ふ、よういふた、ス
 リヤこれなりに濟してやる、イヤナ
 ニそこなやつし殿も重ねて治兵衛に
 云ひ分はないかい、イヤモ勿體いな
 是迄小春がなびかなんだ色の意趣、
 エ、ほんにやれ、懣程せつないも
 のはない、コリヤ二人ながら顔を上
 げい、ム、ハイ、儕等マアよい獄門
 頸ぢやな、ム、ハイ、よふ似合ひま
 すかいな、アエ、たわけめ、小ま
 ごと云はずと早く歸れと二人を引立
 て孫右衛門、門へ突出し、調イヤナニ
 小春の親方どん、貴様達にや言分な
 い、心任せにいんだ、ハイ、
 始めて參じましておやかましく存じ
 ます、もうお暇と表に出、サアコレ

太兵衛様遅いと小春が死ぬるわいな
 早く身受を、アイノ夫もよふ合點し
 て居る、シタガ大金持の此太兵衛が
 この様は何事ぞい、傳海、太兵衛様
 エ懣故ぢやなアと、何をいふやらた
 ましいと、俱にぬけたる腰の骨、互
 にいたわりいたわれ、ちんばちが
 、太兵衛様よつ程惚られさつた
 傳海どえろうどやされた、仇口交り
 そろ、と木の伊をさして歸りけり
 道引違へいきせきと、おさんが母は
 内に入り、コレ孫右衛門、こちの親
 父五左衛門殿、年寄の氣はいらく、
 早ふ安否を聞きたいと、昔堅氣でや
 かましい、ム、御尤で御座ります、
 イヤモ、治兵衛が事は御安堵なさ
 れ、小春が事も何も斯も皆持があい
 て仕舞、眞人間になりましたわいの
 と聞て母親打ほ、笑ヲ、それは嬉し
 い忝いが、迎も心落付る爲、親父殿

へ面晴つらばしにどうぞ誓紙が書いて欲しい
 わいの、イヤモ何が扱何ん時でも書
 きませふと、さう、と書
 認め、母が前へ差し出せば手に取つ
 て讀下し、ム、誓紙はたしかに請取
 ました、サア孫右衛門連立つて行ま
 せふ、ム、ホンニついでに孫も一緒
 に連れて逝ぬ、早う歸つて親父殿に
 安堵させたい、是も十夜の如來のお
 かげ、是からなりとお禮の念佛、エ
 、南無阿彌陀佛も、口ごもる
 心ぞ直に佛なり。

(床本) 紙屋内の段 (切)

門送りさへそこ、に治兵衛は傍に
 あり合す定木を枕轉寝のあたる炬燵
 の小はる時、まだ曾根崎を忘れずか
 と退けるふとんの内さへも涙に濕る
 其風情、おさんは呆れつく、と顔
 打守り打守り、エ、餘りじやぞへ治

兵衛様、夫程名残が惜なら誓紙書ぬ
がよござんす、なぜにお前はその様に
私が憎ふござんすへ、ア、コレ〜
ソリヤまあ何を云やるぞいの、子
までなした二人が中に、イエ〜憎
いそうなく憎ましやんすが嘘かい
なア、おと〜しの十月中の亥の子に
炬燵あけた祝儀込、ソレ處で枕なら
べて此方は女房の懐には、鬼が住か
蛇が住か夫程心残りなら泣しやんせ
〜、其涙が蜷川へ流れたら小春が
泣で呑みやらふぞ、餘りむごい治兵
衛、何ぼお前にとどの様なせつない義
理がある逆も二人の子供お前何共な
いかいなと心の限りくどき立、恨み
歎くぞ誠なる、ヲ、尤じや誤つた悲
しい涙は目より出、無念な涙は耳か
ら成共出る成らば云ずと心見すべき
に同じ目よりこぼるゝ涙、足かけ三
年が其間露程もりん氣せぬそなたに

云も恥かしながら此間も曾根崎で残
らず聞た小春めがぶ心中、今と云今
夢も覺め思ひ切てはゐるけれど、ア
ノ太兵衛めが急に身請をするとの噂
退て十日も立ぬ申請出さるゝ義理知
らずの畜生めが事は心残りねど間屋
中の付合にも金の工面に盡し故、小
春を退たの何んのとて、えしれぬや
つらが口の端にかゝるが無念な口惜
いとサ思はず涙をこぼしたはいのふ
エ、そんなら小春様はお前に、あい
そ盡し云てアノ太兵衛が所へ行く筈
かへ、ハテきよと〜しい其聲はい
の、イ、エイナアそんなら小春様は
生て居る氣じやない死なしやんすは
いな〜、ハテ扱何ぼ發明でも追は
町の女房じや、アノぶ心中者が何の
死ふぞ、イエ〜そふじやござんせ
ぬ小春様にぶ心中は芥子程もないけ
れど、日外よりお前のそぶり、何を

云ても、うかくと、もし悲しい目
を見よふかと案じ過して小春様へい
としいと思わんす、治兵衛殿の爲じ
や程に思ひ切て下さんせと書くとい
てやつた文、引かれぬ義理と合點し
て親にもかへぬ戀なれど、思ひ切る
との嬉しい返事、是程眞實な心で何
の太兵衛の所へ行かしやんしよ、請
出された其儘に死る覺悟に違はない
小春様を殺しては、此さんが義理立
ずどうぞ命が助けたい思案して下さ
んせ、ひよんな事どうせうと始めて
明す女房の誠、ムウそんならアノふ
心中と見せたのは、そなたの頼か、
アイナア、ホイそりややつぱりおれ
を大切から、ハアそうとは知らず今
迄も義理知らずの畜生のと恨だ心が
恥しい、アコレ夫云手間でこな様往
てどふぞ殺さぬ様にしてしんせて下
さんせいなく、ハテ小春が命助か

るは百五十兩せめて半金成り共手附に渡し、取留るより外はないが、何を云ても金の工面に盡きた此身、ノウ仰山な、それで濟なら安い事と、立てたんすの小引出し明て取出す、ないまぜの紐付帛紗おし開き差出す一包、治兵衛取上びつくりし、コリヤコレ小判五十兩、どふしてそなたがサア此の金の出所も後で語れば知れる事、此晦日に岩國の仕切金さいかくはしたれども、それは兄様と、だんごうして商の尾は見せぬはいな小春様の方は急な事、ソレ其小判五十兩と残りは、わしがと、かい立つて、あけて取出す染小袖兼て、斯とは白茶裏黒羽二重も色かへぬ淺紫の糸目結び、つた鹿の子もおしげなふ子供の物もかい集め内端に見ても甘兩よもや貸さぬと云ふ事はないものまでも、ある顔に夫の恥と我義理を

一つに包む風呂敷の内に情ぞ籠ける私や子供は何着てゐても兎角男は世間が大事、身請してあの太兵衛に一分立て、下さんせと云へどいらへも涙聲、ヲ、過分ぞや忝い、手附渡して取留請出して圍て置か内へ入るにしてからが、ア、そなたは何と云さして打しほるれば、ア、何のいなア心案じて下さんすなへ、ハテモ子供乳母か飯焚か面倒ながら眞實の妹、〴〵持つたと思ふてと、云ふ胸まで突かける涙吞込〴〵で、夫に立る貞節は傍で見ると目もいぢらしき、エ、何にも云ぬコレ女房共、親のぼち天の罰、佛神の罰は當らず共、マ女房の罰が恐ろしい、赦したもと斗にて、伏拜む手を、ア、コレ旦那どの、何しやしんす勿體ない勿體ない事して下さんすないな、モ〴〵手足の爪を放しても皆夫への爲じや

もの、後の間ではせんない事、サア〴〵早ふと三五郎呼出渡す風呂敷懐へ金押入れて立出る、治兵衛殿お宿かと門口遣入る五左衛門ヲ、是はしたり舅殿、マアよう御出も夫婦はうぢん〴〵三五郎が脊負たる風呂敷見付てコリヤあほうめ、其包みどこへ持つて行く又質屋へうせるのか、こつちへおこせと引たくられ、びつくり拍子拔參りの宵に知れたる心地にて一間の内へ入り舅は猶も興に乗つて大方斯であらふと思たはい、着類着そげを質にまげて、お山狂ひに仕上るのじやなお山狂ひに、コリヤヤイ女郎の誠とな鬼瓦の笑ひ顔とはない物じやぞよ、サア手短におさんに暇やりや女の子は母へ附が世間の大法ジャガおすえはさつきに、祖母が連れて戻り此誓紙をひけらかしておれに渡した、ア、えらい様でもさすが

は女こんなで行のじやないぞよ、サア誓紙の替りに去狀書、あんだらくさいと引裂し、治兵衛が顔へ打付てお上にどうさり大白なり、おさんは聞兼、コレとゞ様、ソリヤお前聞へませぬはいなく、こちの内の身體のおとろへたのも皆お前からおこつた事ないもせぬ銀山にかゝつたと云て三十兩借五十兩借、あげくには其銀山がつぶれたとやら元も子もないようにして仕廻しやんしたぞへ、男氣な治兵衛殿舅の事なり云出せばこつちも恥と證文も残らず戻し濟さしやんした其時には、コレ此怖い顔に涙をこぼして悦ばしやんした事をおまへよもや忘れはさしやんすまいがの、お前又主の悪所通ひも元の起りはこなさんから起つた事、れつきと仕分で貰ふた身代、何して金が滅たぞと本家の不審が立つた時、ハイ

舅殿に取れましたと鼻毛らしう云れもせずと口へ出して云こそさつしやらね志を推量して初手の間の茶屋通ひは世間へ聞へにもさつしやる事かとほんにやれし行しやる度しにわしや後から拜んで居た拜んで計りゐたわいな、其大恩を打忘れあほうじやの、イヤたわけのと假初にも勿體ない、こらへて下され、こちの人、とゞ様逝で下さんせと、なだめつ叱りつゝ兩方へ我身一つの、せつなき、つらさ思ひやられて道理なる思ひは同じ、うき思ひ身の云譯に紀の國屋小春はこゝへ來かゝりて、様子ありげな内の體、逢てはいかゞと用水の蔭に隠れて閑居たるとは知らずして治兵衛は手を突、御立腹の段は御尤、おさんが申は皆むだ事、私心に存せぬ事此儘濟せて下されと詫れど聞ず、イヤならぬはい何にも云

ふ事聞事ないはい、おさん戻せば事はすむが併拵へおこせし道具衣裳改めて封付んと立上れば、おさんは驚き、ア、コレとゞ様衣裳道具も揃ふてある、エ、モウ改めるには及ばぬとかけふさがれば、つき飛しぐつと引出し、コリヤどぶじやと一重二重引出しの數もありだけ押入迄底を敲いて五左衛門口あんぐりと明、入物指すにも指れず言葉さへ屢し呆れて居たりしが治兵衛とつくと心を定めコレ舅殿此五十兩は女房おさんが衣裳道具のかはり不足にはあらふが持てござれ、エ、ハ、ハ、ハ、そふはかいへ、ア、そふはかいハ、ハ、ハ、イヤ又どふ云ても大身代じやつてのが、このしだらを見るからは、いよゝ娘は連て歸るサア、うせふと引立れば、マア、待て下さんせいな、アモあゝ云ひ出してはか

なはぬと、様、私しやマア歸ります
云迄はないけれど勘太郎が事、を
頼みますぞへ、朝飯前に忘れずとな
ナソレ桑山の丸子、吞して下さん
せへ、ム、氣遣ひ仕やんなマア思ひ
も寄らぬ今此仕儀とんと心も落付ね
ど、そんなら暫く別れて居よ舅殿も
娘の事まんざらむごふもさつしやる
まい、ツイまた戻りやる様に成ぞい
の、アイ、コレな申治
兵衛様、必ず短氣の出ぬ様に、エ、
小面倒な暇ごひ、サアきり、歩め
と引立る聲に目覺す勘太郎、か、様
か、さんのふを聞捨に後に見捨る子
を捨る簀に夫婦の二股竹、永き別れ
とハア出て行、しほれ、し後影見
送り、小かげより小春は内へ駈入
ば、ヤアそなたは爰へどふしてと尋
る内にも稚子がか、様のふとしたふ
子を見るに二人はいと猶思ひくず

をれ抱しめ透せば、すや、稚子を
いぶりながらもくどき言、エ、ツウ
ともふ何から云ふぞ治兵衛様、此間
も曾根崎で愛想盡しな悲しい別れ思
ひ切てはゐるけれど、あの太兵衛に
身うけしられては所詮生てはいぬ覺
悟、此世の名残りに、たつた一目と
來る事は來ても折あしく立聞した内
の様子あれ程貞女なおさん様にあふ
ぎの別れさせますも、皆私から起つ
た事、コレ勘忍して下さんせ、
サイノ眞實な入譯を聞けば聞程此身の
誤り、あの様な女房が三千世界にあ
らふかいのふ、此言譯にはそなたも
おれもスリヤこな様も覺悟極てエ、
忝ふござんすと、抱しめたるないじ
やくり、胸と、に云せけり、高砂
や此重箱に餅入て片言まじり、あほ
ふの三五郎机に乗し三ツ具足兩手に
抱へ二人が眞中、サア、氣疎

い物に成たじやないかへ、アノさつ
きにお家様の云んすには、コリヤ三
五郎よ、おれが留守になつたら大か
た小春様がござんす程に、そふした
らアノ且那樣とアノソレいまの、ム
、祝言さすのじや、我を頼と云てお
かんしたはいな、そこでおれが思ひ
つきじや、花瓶の松に鶴龜酒の取つ
たがなかつたさかいで、水を銚子に
入て來た媒介役のエ、おれ様じや、
コレ禮には好の虎屋まんぢう、コレ
今からあほふと云んすなへ、サ
ア、早ふ吞んせ、ハ、ア二人
ながら泣んす、ア、コレなんの、
ようござんすかハア扱はコリヤ嬉し
涙じやの、アイノこな様が云んす通
り嬉し涙が、こぼれたはいのふ、
去ながら治兵衛様と祝言してはなど
ふもおさん様へ、エ、何のマア濟ぬ
事はござんせぬはいの、お家様は出

しがらに成て、是ほど味い鯉節をお前にやらんす事じや物、志を無駄にせずと、きりく飲でさゝんせいのくふ、ム、コレヤ三五郎が云ふ通り祝言じやと思へば義理もあるが互に末期の水盃、ムならばお酌を申さふかい、涙乍に取上る酒と水とはかはらけの土になる迄葬禮の一本花や鶴龜の蠟燭立も消る身と思へばいと胸せまる、サアく目出度ふなつて來たワイ、エ、誰ぞマア謠唄がこいでなど見やる外面へ四ツ子の墨の衣に、わらじがけ安養寺尼寺常念はつちソリヤコソ來たわとあほふはかけ出抱て這入るを顔見て恟驚やお末じやないか、わりや一人戻つたかそふしてマアかはつた風をしておるな、アイぢいさんにこんな美しい着物仕てもらふた、餘り此べどは白いによつて何やらたんと書て下さつた

此書たのを、とゞ様や小母様にちやつと見せてこいと云て祖父様が門口迄つれて來て下さつたはいのふ、ヤアと二人は立寄てあたふた脱す墨染の下には何か白無垢に、おさんが筆のちらし書、エ、ナニく涙ながら一筆しめしまいらせ候、エ、アハ、さき程父様連立歸られ候節、小春様御忍ばせの姿確に見請候へ共御存の譯合故御目もじも成がたく書殘し申上まいらせ候、ア、コレ治兵衛様一寸マアわたしにも讀まして下さんせくいな、ア、エ、ナニくとかく連合の命が助けたさ小春様へわりなきお願ひ申上候ひしにお開届給はる嬉しき、海山にもかへまほしく、何ぼう忝ふ存上まいらせ候、エ、この御恩を送り候には末々お二人を御夫婦となしまいらせ候よりほかなくと存じ候、エ、その上父様の眞

實をきゝ我がことはこれ迄の縁と諦めまいらせ候、又お末ことはこなた乳にて育て申べく候、勘太郎が事を小春様へくれんくも頼上まいらせ候エ、コリヤマア何の事じやぞいの、ソリヤ聞へませぬはいな、おさん様私しやお前からお禮請る覺はない、コリヤマア、私を衛ながらすかいなく、コレイナアコレ治兵衛様どうぞまあおさん様を呼戻して下さんせくくと立たりゐたり、うるくと譯も涙にくれ居たる治兵衛は又も引とつて、エ、ナニく舅五左衛門申入候、エ、アの舅親父の思知ずめ、うぬがろくな事書おる物じやア、コレそのやうに腹をたてずと一寸讀てみやしやんせくいな、エ、とんともう面倒い、エ、舅五左衛門申入候六年以前あたはぬ銀山にかゝり御損失を尋候處、掣舅の由縁を以て

證文残らず返し下され千萬忝存じ奉候、フ、ン知た事ぢやわい金子の減少、本家への閉を思召それ故の遊女通ひ始め嘘が誠と成は我人若年の時を思ひ出し申候、ア、成程エ、先頃娘に右の入譯委細に承知仕候故、輕少ながら金百五十兩先刻衣裳相改め候節、たんすの大引出しへ差入置き申候、ア、コレ小春、あのたんすの引出し明けて見や、サ、早うしやいのいゝやいの、其下の方ぢやわいの、ム、ほんに爰に入てござんす、エ、あるかエ、右金子を以て小春殿を請出し、ア、コレ小春、一寸マアコレを見やいの、右金子を以つて小春殿を請出し長く御添下さるべく候、エ、娘さん事はお末諸共今日尼に致し、ヲ、コレ小春、おさんが尼になつたといの、エ、おさんが尼にならんしたたら私や

何とせふぞいな、ジャテ、この通りおさんが尼に成ると書いてある、おさんが尼にならんしたたら、わたしやどうしよう、おさんが尼になつた、あゝでも、おさんが尼になつたといの、エ、娘さん事はお末諸共今日尼に致し、貞玉智月と法名付、天下茶屋尼寺安養寺へ連行先刻下されし五拾兩は二人の者の飯料即寺へ詞堂に上申候、皆迄讀ず兩人はわつと斗に聲を上げ、そりや胴慾なおさん様是まで愀氣もなされず途して給はる其御恩、聞入たるがかせになり、こんな事なら其時になぜふ云ては下さんせぬ、コレナア申治兵衛様、おさん様を呼戻し千年も萬年も添とげて下さんせ、此子は可愛はエ、マアないかいな、見れば見る程いたいけな愛にこぼるゝ稚子の乳房にはなるゝいぢらしさ、孤子

如 月 特 別 興 行

一月三十一日初日

毎日 ヒル正 午 二回開演
 毎日 ヨル五時半

「主婦之友」連載
 小島政二郎原作
 中井榮孝脚色並演出

第一 新 妻 鏡 三幕十場

日本文化聯盟主催
 鳥紀二千六百年奉祝懸龍祭
 鳥江鎮也作
 高麗貞役 演出

第二 西南役 黎明の母 一幕二場

瀨川春郎作並演出
 常磐津連中出演

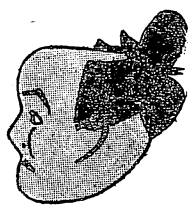
第三 新編有馬猫 二幕八場

御観劇料
 一等席 一圓八十錢
 二等席 八十錢
 一階椅子席 五十錢
 (他に入場税一圓)

角 座
 どうとんぼり

となしたるは皆私からおこつた事、勘忍してと斗にて取亂したるわび涙理りせめて哀れなる折からうそく善六、太兵衛、門口細目にこりや見付たヤイ治兵衛め、おれが請出して女房にする小春、うぬは又何で引き込んだ、ア、コレ太兵衛様く、こま言云にや及ばぬ、是迄重々意趣ある治兵衛めぶち殺して腹いせと双方よりぶちかゝる、利腕掴んでコリヤく三五郎く、小春に怪我をさせぬ様働け働け、ヲツトまかしよと箆の助太刀あなたこなたをちらく見ると目あやふく氣をひやす、いらつて打込善六、太兵衛、折よくはづせば二人はどし打、そりや治兵衛めが切おつたと、わめけばぜひなく乗かゝり、日頃の意趣ととゞめの刀、コリヤく三五郎よ、お末を連れて奥へ行く、コレ小春く、コ、お

じゃく、なんにもこはい事はないく、はてこわいことはないわいの斯成上は是非に及ばぬ、最後は網島の大長寺、人なき内にサアおじやと手を取急ぐ悪縁の末は涙のもしを草嚙の種と成にけり。



行興慕追郎治鷹村中・年百六千二紀皇頌奉

東 西 合 同 大 歌 舞 伎

二月初日

毎日午後三時開幕

金澤南北新編演出

第一 栗山大膳 四幕

第二 中村筋治郎 追 森口上

第三 浮瑠璃 曲輪輝 一幕

第四 神戸事件 二幕
郷田原作並演出
 食蒲南北衣裳考案

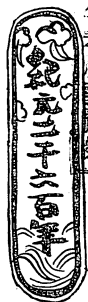
第五 天石屋戸 一幕
日本文化中央聯盟主催
 皇紀二千六百年奉祝聖能祭
 様茂初舞台披露附

第六 奴道成寺 一幕

御観劇料
 四等席 五十銭
 三等席 一十圓
 二等席 二圓
 一等席 三圓五十銭
(他に入母税一圓)

京都四條

南 座



奉頌皇紀二千六百年

上の巻 源平時代の貞節
 中の巻 足利時代の忠孝
 下の巻 昭和の義烈

輝く皇紀二千六百年を奉頌し、記念する爲め、日本固有の傳統的古典藝術を誇る文樂人形淨瑠璃は白井松竹會長の原案により、當座の新企劃として「奉頌皇紀二千六百年」の記念劇を發表することになり、内容的にも音曲的にも最優秀なものをとて嚴撰の結果「伏見里」（源平時代の貞節）、「大楠公」（足利時代の忠孝）、「三勇士名譽肉彈」（昭和の義烈）を上中下三部曲として特別上演致すことになりました私達はこれらの舞臺

を通して日本人の性格の諸相を再認識すると共に、私達の胸底に開えて來る日本人の共感の調べを貴く思はねばなりません。

次に各狂言の解説を附します。

「伏見里」は近松門左衛門が元祿十二年正月（二三五九）竹本座に書き卸した「源氏烏帽子折」全五段の第二段の常盤御前道行の件りに當るもので、常盤御前が藤九郎盛長に助けられ乍ら三人の幼兒を伴つて大和に落ちようとして伏見の里で雪の夜に惱み、平宗清の情に助けられる場面です。雪中に苦しむ常盤御前の貞節は私達を感動さすものがあります尙かの「一谷嫩軍記」熊谷陣屋の段に現はれる源義經對石屋彌陀六の件りも、この伏見の里と照應してこそ一層興味も深くなります。

「大楠公」は正徳元年九月十日（二三七一）から竹本座に上場をみた近松門左衛門作「吉野都女楠」全五段の冒頭、楠正成櫻井驛の遺訓の件りより鶴澤友次郎が脚色作曲したもので七生報國の大信念のもとに敢然として死地に赴く楠公父子櫻井驛の訣別が一段にまとめられて居ます。

「三勇士名譽肉彈」は去る昭和七年二月廿二日上海事變の際、廟行鎮に於て自ら身體に爆藥の破壊筒をつけて世界戦史上、空前の壯烈な戦死をとり、大和魂を世界に輝き見せた忠勇無双の肉彈三勇士を讃へて直ちに昭和七年四月興行に上演をみ、永い傳統を持つ人形淨瑠璃の世界に劃期的な新境地を拓くものとして絶讃を浴びたもので皆様の燃えるが如き祖國愛を煽らずには置かないものです



常盤御前恩愛の段

竹本伊達太夫
鶴友衛門
鶴本南太夫
澤本重造

人形

藤九郎盛長	平宗清	白妙	牛若丸	乙若丸	今若丸	常盤御前
桐竹政龜	吉田玉藏	吉田光之助	桐竹紋之助	桐竹門次	吉田文枝	桐竹紋十郎

近松門左衛門作
上の巻 伏見里

(源平時代の貞節)

(床本) 常盤御前恩愛の段

降る雪の、おと聞く程に靜かなる、竹より奥の一つ庵、猫の通路あと付けし、たゞ一筋の道細く、油火ほのかに揺立て、女の葉かしどけなき引きさき紙を結びつぎ、半ばあげたる伊豫簾、伏見の里の片邊り女主人の軒さびて問ふ人稀なる折柄に、常盤御前はともし火の影をたよりに尋ねより、大和へ下る女なるが、幼き者を召具して雪に道を失うたり、一夜の情とありければ、十八九なる女房の紙燭かゝげて縁に出で、親子の人をつくぐと打守り、いたはしの有様やお宿申したうは候へども、此

の頃平家の沙汰として義朝のゆかりをつよく詮議の候が、自は白妙として藤九郎盛長が妹源氏譜代の者なれども、不思議の縁にて平家の侍、彌平兵衛の忍妻となり候、今にも夫の宗清殿來り給はば、憂目をこそ見給はん情なしとな思召しそよ、妾が辛きはいとしきゆゑ何處へなりとも落ち給へと、いとねんごろの詞の色紙燭吹消し入りにけり。常盤も今は力も落ちて先へも行かれず後へとは戻られず、頼みの綱も切れ果てせんかたつきておわせしが、間もなく隙なく、心なく、雪はこぼすが如くにて寒風颯々と烈しくて、人の肌骨にしみ渡り肌を刺す事鋭き刃の如くなりいたはしや母上は、つかれたる身を寒氣に破られ、惡寒五體を苦むれば堪へがたやと伏しまるび前後不覺に見え給ふ、今若乙若驚きなう悲しや

と、額を抑へ手をさすり、いかに乙若母上の寒からんに、物きせません尤と兄弟帯解身狭なる、小袖を脱いで母上の、裾や枕に取重ね折重ね、我は厭はで埋もるゝ雪の裸身あはれなり、枕を上げ、扱いたはしの子供やな、かばかり母を大切にいかに孝行なればとて、和御前達をこゝえさせ、親も冥加につくるぞよと、風ばしひくな衣着よと着すればぬいで母に着せ、いや我々は寒からず、侍の習ひには如何なる雪にも軍して、よき敵と組まん時寒し冷しなどどて敵に後を見すべきか寒いと云ふな乙若、寒いと思すな兄上とかひくしげにいふ聲に、牛若目さまし這ひ出でて見るを見まねに衣をぬぎ、同じく母に着せ參らせ、手足もふるひ凍ゆれど其の色見せず齒ぎしみし、拳を握り堪ゆる體母は氣もたえ目も眩

み、ア、情なやあさましや、百萬餘騎の大將軍とも仰がるべき若どもに一重の衣を着せかぬるは如何なる神の咎めぞや、いとほしの人達の御身たちが志、綾錦より厚ければ母は着ねども暖かなり、ふびんの者よこち寄れと三人一所にかき寄せて抱き伏してぞ泣き給ふ、ことわりとこそ聞えけれ、月も夜半に更け行けば、彌平兵衛宗清、女の庵に忍びしが雪に映ろふ人影は、何者か怪しやと傘かざしよく見れば、常盤親子にまがひなし、網代の魚ごさんなれあまさじと身づくろひ、なほも様子をうかがふにぞ慈母のあはれみ孝子の振舞さすが源氏の根ざしなりいたはしきよあはれさよ、此人々を助けしとて源氏の運の末ならば終には捜し出さるべし、たとへ搦捕つたりとて、盡きんず平家の御果報の長久にもよも

ならじ、なさけ知らぬは匹夫の勇、殊に我が妻の爲には主君なり、彼是助けて落さんと思ひしがイヤ待てしはし、主君清盛の御眼識を以て仰を蒙り、助けて道たゝず、搦捕つては情なしとつゝまよひつ思案して、さあらぬ體にて戸を叩けば、女房待ちかね柴の戸の雪打拂ひ草鞋もとくく、庵へ伴ひける、今宵は殊なう冷え候ふ、先づ盃と暖めて、暫くさいつきゝれしが、なう宗清殿、みづからは源氏御身様は平家、若し只今にも義朝の所縁とならば、如何し給はんとうらとへば、ハテ云ふまでもなし主君清盛の仰なれば、いかに汝が主なればとて用捨はならず、眼にかゝらば搦捕つて六波羅殿へ引立つる、只何事も知らぬが花と答へしが親子の人々物ごしの手に取るやうに聞えしを、女房はつと當惑の色目を

見て取り、やれ女房、表に小鳥どもが軒に宿りてかましい、あれ追拂ひやれ、ハテ夜な、泊る小鳥ではなし、今宵一夜の、ハテ扱合點の悪いで某が追退げんと弓矢取つてかけ出づる、女房は人々の影隠さんと引きとむる、もぎ放し突退けて空矢四五本さしつめ、射る音に、常盤驚き兄弟をまへうしろに掻抱き、はふ、逃退き給ひける、宗清とつくと見送りて、あれ見よ白妙雀どもが逃げるは、ヤナニ女房、今迄拂ふた小鳥共其まゝに仕て置かば、もし六波羅のヤサア狩人來つて見付なば討取るは必定、某此家に有つて余の狩人からめ取られては清盛公へ云譯け立ず、又おことが忠義も無足なさいせんも云ひきかす通り只いつ迄も雀くと、雀にたとへし若君は成人の後今若君は鎌倉の惣追捕使右大

將兵衛の佐源の頼朝公と號し奉る、乙若君は蒲の冠者範賴公牛若丸は源九郎義經公と末の世に秀でたまひし大將は雪にこゝへ伏見ノ里にて親子四人を宗清が助け置たる源家の草今の世迄も宮々の繪馬にも斯くと知られたり、藤九郎盛長は人々に行逢ひしが、宗清が放つ矢は妹が二心か、いぶかしと庵に立ち事のやうを開届け、横手を打つて涙をはらと流し、爰明け給へ宗清殿、是は白妙が兄源氏の郎黨藤九郎盛長にて候心底によつて妹を刺殺し、御邊と勝負を決せんため是までは來りしが、只今の志生々世々に忘れがたし、一禮のため對面せんと云へば宗清からと打笑ひ、又源張の雀が來つてよしなし事を囁るよな、某平家の扶持を蒙りながら、源氏方の禮をうけ此の宗清が立つべきか、エ、狼狽たる羽

拔鳥、左手も右手も狩人の追鳥狩の網高し鷹にとらるな餌差にさゝれな古巢の雛を飼育て初音を揚げよ若者と情の詞にハツハツハアツ、仁愛深き御恵み、身は臆に成るとても、此の厚恩は忘れ申さず、へエツ頼もし、田の面の雁、春は越路に立歸り源氏一味の友千鳥、大將軍の羽翼下揚げたる旗は白鷺や、群居る鳥の翼を鳴らし會稽の巢立して、上見ぬ鷺の譽を見せん、尤尤急げや急げ山鳥の尾のしだりをの、長居は恐れお暇と夕告の鳥が啼く、あづま路指して飛ぶ鳥の飛ぶが如くに下りける心はさすが大鳥の、千里一はね源氏の運開くる未こそ目出度けれ。



近松門左衛門 原作
鶴澤友次郎 脚色作曲

中の巻 **大楠公**

(足利時代の忠孝)

櫻井驛訣別の段

(床本) 櫻井驛訣別の段

楠 正 成 竹本 織太夫
楠 正 行 竹本源太夫
郎 黨 豊竹 富太夫
野 澤 吉 彌

人形

楠 正 成 吉田 光之助
楠 正 行 吉田 榮三郎
郎 黨 隼 人 吉田 文之助
郎 黨 大 ぜ い

とゞめけれ扱も楠多門兵衛正成智仁
勇を兼備し、死を善道に開る勇將、こ
んどの合戦味方必定負軍、討死の時
極れりと本國へも立歸らず、すぐ
五月十六日有合ふ手勢七百餘騎、馬
物のぐをかゞやかし心の花も咲きか
へる櫻井の驛に着にける、かゝる所
へ遣見の武士馳歸り、只今、河内よ
り和子正行様御出候、と知せに程な
く庄五郎正行、隼人を供の案内に馬
上ゆたかに出來り、夫と見るより馬
乗捨父が前に手をつかへお父上には
御機嫌好くお嬉しう存じます。京都

よりの御書狀により御見送りのため
是迄參上致せしと、ふんぎんに相述
る、正成追愛着の是今生の別れかと
怯む心を取直し、ヤア正行汝をさな
くとも能開をけ、忝くも我帝の勅定
を蒙り命を敵の矢先にかげ身を戰場
になげ打こと譽を取て名を残さん爲
にもあらず、又子孫の榮華を願ふに
も有ず、朝敵を亡し國家安全の爲
慮を休め奉らんと義を重んずる斗な
り、今度の合戦味方必定打負王法忽
ち傾き御代を奪れ給はん事鏡に照す
が如くなれば、我れ一つの謀を以て
度々諫め申せども坊門の宰相邪の理
を勧め君用ゐさせ給はねば力なく打
ツ立ツたり、直に兵庫湊川へ向ひ父
が一期の名残の軍華々しく戦ひ一戦
に腹を切るべきぞ、おことは是より
故郷に歸り父が最期と聞ならば彌身
を全ふして廿にも餘る時金剛山を要

害として勤王の同士を集め、住吉天
王寺に打て出で賊徒を亡し君を御代
に立參らせ、父が憤りを散ぜん事
いかなる佛事孝養も是にはなどか勝
るべき、今生にて汝が顔見る事も是
までぞ、必ず詞を忘るゝなど勇氣擡
まぬ弓取も恩愛父子の鬻別れ泪をは
らゝとぞ流しける、正行聞もあへ
ず、口惜しき父の仰やな楠正成が嫡
子正行こそ負軍を考へ出陣もせざり
しと世の嘲りに落ん事、屍の上の恥
辱に候、殊に親の討死と思ひ定めし
軍場を見捨るなや候べき、是非御供
に連れられずは吾等一騎駆抜け楠河
内の判官が嫡子帶刀正行生年十二歳
と名乗てよき敵に駈け合せ、引組で
刺違へ冥途の道の先駆と思ひ詰めた
る正行、敵の箠をも見ぬ先に歸れと
は恨めしや、幼くて戦場の妨げと有
るならば只今此所にて腹切らん、介

錯してたべ人々と芝の上にとりと居
て聲も惜まず泣ければ、並居る軍兵
感涙に鎧の袖をぞぬらしける、正成
も共に涙は先立どもわざと聲を荒ら
げ、ヤア弓取馬の家に生れて討死す
るが彌うしきか、おこ事を年月養
育せしは父が最期の供せよとは育
てぬぞよ、傳へ聞く獅子は生れて三
ツ目の内親獅子是を千仞の崖の上よ
り突落し其強弱を試すとかや、汝は
今將に獅子の子なり櫻井は千仞の崖
の上、河内は崖の底なり、汝崖の底
に落されて成長を遂げ、再び義旗を
金剛山に懸せば、今日汝が兵庫に來
り父と共に死するより其功は幾倍ぞ
や、斯してこそ庄五郎は父の子なり
汝勇士の機分備らば數萬の敵の鋒先
の巖石も凌ぎて碎く獅子の勢ひ、泰
平の御代とは取返せ、吉野初瀬の名
木も老木は次第に枯るれども、こぼ
るゝ種の色香をつぎ花の名高き山た

かし、二葉の苗を残すこそ岩ほと
らん楠が、長き世までの形見ぞと、
腰に帶たる御刀恭々しく押戴き、コ
レ此一刀は畏くも今帝より賜はりし
菊作りの御太刀是を汝に與ふる間今
日以後此刀には恐れ多くも大君の御
稜威と父が魂の宿れるものと心得て
大切に奉持せよと、正行が手に渡し
サア予も是より出陣せん、汝も疾く
河内に歸り君に忠勤怠るな、サ云べ
き事も是限りさらばと斗り馬を引寄
ゆらり打乗思ひ切たる心にも、をゝ
しき我子の武者振りを見るも限りと
目に脆き儘に歎きの正行も親の教訓
詮方も涙押へて立上り、手綱かいぐ
り打乗て、親子此世の別れの詞さら
ばとだにも云ばこそ、互ひに駒を引
返し東西に別れしが振返りゝ親は
我子の身の行衛子は又親の最期の末
思ひ包みて弓取の、泣ぬを今の泪と
は餘所の袂にせきかへる湊川へぞ。



三勇士名譽の肉弾

下元旅團長
松下中隊長
江下一等兵
作江一等兵
北川一等兵
小隊長
馬田軍曹
内田伍長
便衣隊

竹本大岡太夫
豊竹和泉太夫
竹本相生太夫
竹本織太夫
竹本源太夫
竹本津磨太夫
竹本常子太夫
竹本隅若太夫
豊竹松島太夫
竹本播路太夫
鶴澤友造
鶴澤友平
鶴澤友友
鶴澤友友
鶴澤友友
野澤吉藏
竹澤團藏
豊澤廣作
豊澤仙松

松居 松翁原作
鶴屋 南北脚色
鶴澤友次郎作曲

三勇士名譽肉弾

(昭和の義烈)

(床本) 三勇士名譽肉弾

志士は溝壑にあるを忘れず、勇士は其元を喪ふを忘れずとかや、時しも昭和七の年、月は如月下二日、御國に忠を筑紫路の譽も高き三勇士、語り傳ふる敷島の大和の國の櫻花、幾千代かけてにほふらん、爰は所も上海に近き村落麥家宅、霜さへ氷る曉に間近く敵を沖の石、かはく間もなき汗や血に、まみれてつくす工兵の其壘壕に前進の命を、松下中隊長折しもあれや舊曆の十七日の月冴えて怪しの人のうごめく影、誰か、ハイ私は崩行鎮鐵條網ある咄し澤山

くする事有、中隊長殿怪しい奴をとらへました、ムよし連て來い、ハイ、オイ、言事が有ならそこで言へそれ崩行鎮中々堅い、機關銃澤山ある日本兵少ない中々落る事ないナ、外へ廻るヨロシイナ、黙れ貴さまは誰に頼まれてそんな馬鹿な宣傳をしに廻りよるか、怪しい奴だ、馬田軍曹縛れ、ハ、ア中隊長殿危ない事でしたナ、あぶない事だった、オイ、馬田軍曹そやつ何か持てゐないか身體検査をして見よ、ハア中隊長殿軍隊手帳がありました、ムそふか、第十九路軍の正規兵です、ム、扱はそうかと顔見合せ、油断ならじと騒やく折しも軍用電話、けたムましく内田伍長は取上げて、ハ、ハ、ハ、松下中隊で有ます、旅團命令で有ますか、ハ、ハ、ハ、復唱、本隊は其主力を持って二十二日午前五時三十分を

人形

松下中隊長	吉田玉藏
便衣隊	桐竹紋太郎
馬田軍曹	吉田玉市
大島少尉	桐竹政龜
東島少尉	吉田小兵吉
島田一等兵	吉田玉徳
古川一等兵	吉田玉米
高野一等兵	吉田多三郎
黒澤一等兵	吉田萬二郎
村田一等兵	吉田兵二郎
村上一等兵	吉田兵松
北川一等兵	桐竹紋十郎
江下一等兵	吉田文五郎
作江一等兵	吉田榮三
内田伍長	吉田文二郎
下元旅團長	桐竹門造
兵士	大ぜい

期し廟行鎮の總攻撃を開始す、松下中隊は其正面の鐵條網を爆破し、五個所に歩兵突撃路を開くべし、終りハ、ハ、ハ、分りました、中隊長殿命令が參りました、ム、中隊長殿電話に出て下さい、よし、ハ、松下大尉であります、ハハ分りました、本中隊は直ちに決死隊を募り確かに其時間までに敵の鐵條網を破壊し完全突撃路を開きます、終り、と答ふる聲も覺悟の一諾、馬田軍曹進み寄り、中隊長殿旅團の御命令でもあの敵の鐵條網は實に構築堅固で我爆撃機が日夜必死の奮闘も未だ何等の効果も無く尋常一様の手段では逆も駄目だと思ひます、とつぶさに語る敵情に、松下大尉につごと笑ひ、其出來ない事を仕遂るが日本軍人の誇りで有る、日本軍人の上には常に天佑有て守らるゝ、是日の本の常ぞかし

小隊長集れ、只今の旅團命令に依て當中隊は決死隊を募る、大島小隊長は三名宛二組の先發班、後續班の決死隊を選抜せよ、東島小隊長は豫備班として三名の決死隊を選抜せよ、終り、復唱、大島小隊長は、三名宛、二組の先發班後續班の決死隊を選抜します、終り、復唱、東島小隊長は三名の豫備班を選抜します、終り、よし、小隊長は選抜兵を集めてくれ、ハイ第一小隊島田一等兵、古川一等兵、高野一等兵、黒澤一等兵、村田一等兵、村上一等兵集れ、第二小隊北川一等兵、江下一等兵、集れ、聲に應じてばらん、と居並ぶ諸士の勇しや氣を付、番號、一、二、三、四五、六、七、八、九、集合終りました、よし、扱て九名の者に中隊長は一言す、只今旅團命令が降た、本中隊は正面の鐵條網を破壊し、五條の突

撃路を開くべき重大なる任務を受け、然し此作業は尤困難である、されば今日迄多くの兵士は倒れ、様々の犠牲を拂つたが、中々堅固の要害である本隊は誓て此名譽ある任務を完うし目的を成就しなければならぬ、そこで爰に決死隊を募る、依て此決死隊に選拔せられたお前達は一命を賭して此任務を全ふしてくれい、ハイ我々は決死の覺悟をもちまして、事に當ります、ヲ、よく言つてくれた嬉しいぞ、諸君が國家の爲に盡さんとする赤誠の精神に對し、松下大尉愈々感激にたへない畏れ多いことではあるが、大元帥陛下に置かせられては此忠誠を聞し召さば嘸や至情の發路ぞと御嘉納あらせらるゝ事であらふ、皆わかつたか、ハイ、わかりましたと意氣冲天の勇士の言葉、ヲ

、勇ましい天晴だ、と口には言へど心には御國の爲とは言ながらあたら勇士を戦場の土と化するか、哀やと怯む心を取直し、氣を付け、只今より、擧手の禮を以て袂別にかへる敬禮、互に擧手の一禮はこれぞ此世の名残りぞと別れてこそは進み行く。時の至るを三人が月の光りをあびながら、語るも清き、戦友の胸の内こそ由々しけれ、作江伊之助こなたを見やり、ア、月はますく、冴えてゐるナア、オイ北川なにをぼんやり考へてゐるのだ、何か國の事でも思出したのか、ナニをうじやないよ、おれはひそかに謀事をめぐらしてゐるとでもいふのかな、兎に角考へてゐるんだ、ナニ謀事ハ、、、考へもくそもあるものか、此場合手段はたつた一つしかないのだ、貴様の手段てのは大底見當がついてるよ、負ず

嫌いの貴様の事だから、鐵條網へ喰ひつかふとでも言ふんぢやろ、狼じやなか、よせやい、アハ、、、互ひに通ずる心と心、オイ江下ゐるかと言ひつゝ來る内田伍長、ハツ江下居ります、お前國から、郵便が來てゐるぞ、お前ばかりうまくしてゐるナア、貴様も昨日來てたじやないか、そふだつたナア、併しお前途選抜にあつてよかつたな、中隊長殿の御訓示もあつたが皆しつかりやつてくれよ、中隊長殿の處へも一度來るだらう其時又逢はふ、待てゐるぞ、と言捨てこそ急ぎ行く、江下手紙取上ればオイ江下どこから來たんだ、お父さんからか、イヤ家からじやないよ何處かの子供からだ、では慰問の手紙か、ア、コレハ此間日本を立つ時久留米の停車場で逢つた少年からの手紙だ、フム、ではお前に天子様の爲

に働いて下さいといふ、激勵の言葉
を與へてくれたと言つて、スツカリ
昂奮して居たアノ小學生からの手紙
なのか、おれはアノ少年の一言の爲
にいつでも死ぬる氣になつて、愉快
に日本を出て来る事が出来たんだ、
モウすぐ死ぬかもわからないが、こ
ふして呑氣にしてゐられるのは、矢
張りアノ少年の力なんだ、マア見て
くれよ、こんな事が書いてあるよ、
私の大事な兵隊さん、あなたは立派
な手柄をして、久留米へ歸て来る日
を私は毎日指を折てまつて居ります
よ、あなたの凱旋の時には、家中お
父さんもお母さんも兄さんも妹もみ
んなで迎へに行きます、私の大事な
兵隊さん、本當に天子様の爲めに
働いて死なないで歸て来て下さい、
ア、可愛い事をかくもんだナア、他
人でさへこんなだもの、北川、江下

に貰い泣きはいいが、江下が死んだ
らお前も死ぬか、江下が死ななかつ
てどうせ死ぬんじゃないかに、ウム
そうだ、アノ鐵條網と來たら今まで
誰も手がつけれなかつたんだから
な、一寸でも傍へよれば、ソクボウ
砲や爆撃砲であびせかけられるんだ
から、どうせのがれつこはないんだ
そふだ、破壊筒をかつぎ込んだとこ
ろで口火をつける前にみんなやられ
て仕舞んだからな、今度こそは此我
々の最後の働きが日本軍隊の運命に
關するんだから、しつかりやらなく
つちやいけんぞつ、ム、さつきお前
が言つた謀事と言つたのは其手段を
考へてゐたのか、俺も先刻から決心
してゐるんだ、決心ならおれだつて
してゐるんだ、それなら三人共同じ事
をしてゐるんだ、それなら三人共同じ事
を考へてるんだな、そふだ、じゃ破
壊筒を自分の體へくもりつけて體と

一緒に爆破させる考へなんだナ、ウ
ム此方法が一番上策なんだからナ、
上策の下策のといつてコレが日本軍
隊に取てたつた一つの名策なんだ、
自分自身が爆撃彈と一緒に敵の鐵條
網へ飛込まふといふんだ、是程慥な
爆發の方法はないからナ、やるかや
らふしつかりやらふぜ、日本帝國の
爲だ、作江、江下、北川、サコレデ
お互の一生の別れだ、水盃といふ處
だがどうせ火に焼かれて死ぬ體だ、
一つ煙草の呑廻しといふのはどふだ
らうナ、成程、こいつは面白い、デ
ハ作江お前から呑み初めるよ、じゃ
おれから呑むとしよふ、よし來た、
煙りはうすき紫の其あかうばふ譽れ
の火五ひに目と目、心と心、併しこ
うして死を決して見ると存外氣が樂
になるもんだナア、おれア是から芝
居でも見に行く様なほがらかな氣が

してゐるんだよ、おれだつてそふだ
 こうなると何だか呑氣になれたよ、
 併しうまく鐵條網に近付けられ、
 が、そこが天祐だ、此三人の意氣で
 彼奴等をめくらにして見せら、アオ
 イソーラ見る雲が出て來たぜ、月が
 隠れてくれりやいゝがナア、フムア
 ノ雲の具合じゃ、大丈夫だ、ハ、ア
 いゝ月だナア、十七日の月だ、アレ
 を見ると思ひ出さずにやゐられねエ
 ナ、國のお母さんに別れた晩の事が
 作江アノ晩の貴様の話を聞た時、お
 れは貰ひ泣をしたよ、お前のお父さ
 んは日露戦争のとき輜重輸卒だつた
 ので、勳章一つ貰はずに歸つて來た
 といつてお母さんは一緒になつて口
 惜しがつてゐたそうだな、今度こそ
 は此事を聞たらお前のお母さんも泣
 いて嬉しがるだらう、ム、子供の時か
 ら始終言はれてゐたんだ、立派な軍

人になつて國家の爲に働いてくれつ
 て、其時が今恰度やつて來たんだ、
 おれはそれを思ふと北川、江下、俺
 も嬉しいよ、しつかりしろよサモウ
 時間も追つて來たから、そろゝ仕
 度をしなければなるまい、フム中隊
 長殿に此計畫を報告して行かなけれ
 ばいけないだらふ、サアアノ人情深
 い中隊長殿の事だから、いくら決死
 隊とは言へ、始めから死でかゝる様
 な無茶な事は許さないかも知れない
 ぞ、それもそうだ、謀事は密なるを
 何とか言ふ事があるだらふ、仲間
 も黙つて別れた方が一層サブゝし
 てよかばい、成程それもそふだナ、
 男らしくて、其方がいゝや、サア是
 で此世に思ひ残す事はない、ではボ
 ツゝ出掛けよふぜ、折しもきこゆ
 る機關銃、三士は耳を傾けて、ヲ、
 先發班が出發したぞ、爆發せんじや

新 興 演 藝 部 公 演

二月一日初日

あきれた。ぼういず

かみなりもん舞踊座

劍戟 都五十鈴一座

大合同公演

新興特選

萬 才 連

二十餘名出演

どうとんぼり

浪 花 座

ないか、不發らしいぞ、オウ後續班も出發したぞ、やられたらしいな、フム味方は慥かに仕損じたぞ、あきれて暫し言葉なし、馬田軍曹かけ來り、オイ残念だ先發班後續班も全滅したぞ、残るはお前達ばかりだ右翼は危機に瀕してゐる、大日本帝國の爲だ頼むぞ、言捨て、こそ急ぎ行く、サ愈々やるのだ、見ろ月が隠れたぞ、天祐だ、たぞ有難い、三人目と目を見合はせて、心の覺悟御國の爲、身は肉彈の三勇士流石は櫻大和の誇り其花またぬ勇士と勇士互ひに抱き月影も雲にかくれて打出す砲彈の響き轟きて廟行鎮の要害は蜘蛛手と張りし鐵條網近づく事もならの葉の此手かの手も盡果て、策をほどこすすべもなし、折しも忍ぶ三人の影破壕筒をひんだかへ亂射亂撃ものかはと、探照燈の光りをさ

け、鐵條網にせまり行く、天祐だぞ、オイ、點火だ、よし來た、天皇陛下萬歳大日本帝國萬歳、の聲もろとも、天地もゆるがす大爆音、さしもほこりし堅壘も破れて爰に突撃路夜は明はなれ東天に輝き昇る日の御旗、下元少將しづくと隊伍と、へ立出る、氣を付けつ、松下大尉の報告を委しく聞いて旅團長あまた、び打うなづき、扱は北川、江下、作江の三勇士の爲に堅固の鐵條網も破壊され、突撃路は開かれ容易に我軍の勝利になつたるも、皆是三勇士の賜物じや、爰に下元旅團長以下戦友一同謹んで三士の英靈に氣を付け捧げ銃、

(これより軍歌合唱)

肉彈こゝに奏功の響れを世々に傳ふらん。

不 二 洋 子 一 座

二月一日初日

晝夜二回開演

第一 弘城を護る者

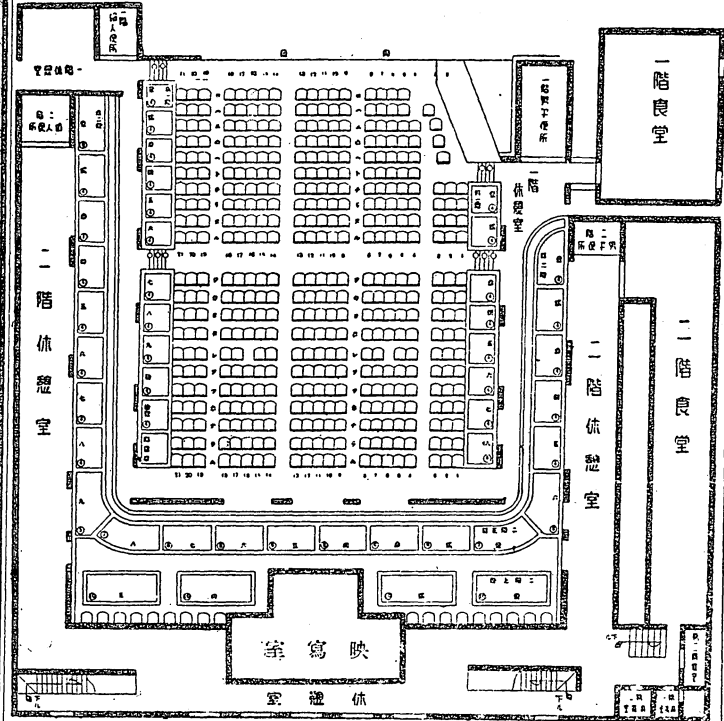
第二 恩愛さんざ峠

第三 時雨節雁の旅

神戸湊川

松竹劇場

内案御席場御座樂文



御、觀、席、は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前、賣、切、符、壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は南四七壹壹番で御座ります

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります
二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

管文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は 常に大阪の誇りと世界の舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませう、皆様の御期待に反かね様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが、尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座います。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますから成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ります。賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座居ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座居ります。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座居ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相動めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として
案内内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問、各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じよろづ、御案内申上ける事に致しました。御一報次第登壇上、どうぞ御利用下さいませ。

專用電話南⑤三七七八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十五年一月廿一日印刷

大阪市南區久左衛門町八番地

昭和十五年二月一日發行

發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹株式會社大阪支店

印刷所 永井日英堂印刷所

一部 金二十錢

文樂座南一食堂

御食事の御用は一幕前に御下命賜
はれば至極御便利で座すまい

大坂四ツ橋

南温泉料理

御宴會にも
御家族連にも

電話南
⑦⑤

—	—	—	—	七
三	三	三	三	〇
二	三	三	三	一
四	三	二	一	一
番	番	番	番	番

